茜色の君に恋をする

ぷんにゃご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
茜色の君に恋をする

【Ｎコード】
Ｎ８５８０Ｘ

【作者名】
ぷんにゃご

【あらすじ】
孤独な娘、羽山優菜は小学校教師となって、かつて暮らした街に帰ってきた。そこで昔彼女をいじめていた同級生、冬木志郎と再会する。教師として真摯に子供たちと向き合おうとする優菜。そして、そんな優菜に近づこうとする志郎。地方の街と小学校を舞台に、幼馴染みの二人の関係はどんな風に変わってゆくのか……。
※この作品は、以前拙サイトで「茜色は君の色」と言うタイトルで掲載していたものを加筆・改稿しながら再掲載しています。

1．　プロローグ　雨上がりの別れ

羽山優菜（はやまゆうな）は俗に言う、いじめられっ子だった。

小学六年の女子として、別にのろまなだったり不潔だったりした訳でもなく、頭はむしろ良いほうだったし、運動もまぁまぁ出来た。目鼻立ちは目立つ方ではなかったが、端正な造作はむしろ美しいとさえ言える子供だった。普通ならばいじめられる要素はない。だがいじめの理由など、その多くが些細なきっかけから始まるのである。羽山優菜の場合は貧しさだった。ボシカテイであったり、セイカツホゴだのシュウガクエンジョだのという、大人達の話を聞きかじったおませな女子生徒が、どうやらそれが世間的にいいものでは無いらしいと勝手に思い込み、友人同士で噂している内に誰かが「貧乏人は無視しよう」とか言い出し、それからのことだった。

当時の田舎の小学生にとって、その属するコミュニティーから締め出されると言う事がどんなにつらいことか、当事者になってみないと分からない。

いじめを仕掛けてくるのは主に女の子で、遊びの仲間に入れないとか、持ち物をバカにするとか、一つ一つは地味だが、徒党を組む為陰湿である。男子はもっとおおっぴらに「ビンボー」等とからかった。そして彼等の精神的支柱となっているのは、クラスのリーダー、冬木志郎（とおきしろう）だった。

志郎の家は駅前の大きな酒屋で、祖父は県会議員をしている旧家であった。親戚は造り酒屋も営んでいて、立派な家に住んでいた。体も大きく、勉強も運動も人並み以上にできて誰からも一目おかれる存在であったが、どういうわけか優菜は志郎にひどく嫌われていた。クラスの皆は志郎が優菜を嫌っていると思い込んでいたし、志郎自身も優菜を目の前にして「こんなネクラな奴！」と口に出すこともあった。

だが、優菜が泣いたところを見た者はいなかったし、学校を休んだりもしなかった。だが、そのことが一層いじめに拍車をかけたことも事実だった。

彼等の街は大きな市街地まで特急でトンネルを越えて３０分、田園風景が広がり、奈良時代の遺跡が多く点在するベッドタウンだった。大きなスーパーも進出し、都会から私立の有名校も移転してきたから、これからますます発展していきそうだったが、昔からそこに住む人々の意識は良くも悪くも保守的な気風が残る。

その街はそう言うところだった。

優奈が五年生の一二月。街に初めてできたキリスト教会で、クリスマスに地区の小学生の子供たちをクリスマス会に招待すると言う行事があった。田舎にしては珍しく、本格的な西洋の香りが漂うクリスマス会に子供たちはワクワクしながら教会に集まった。

イエス様の生涯の話や、賛美歌を2曲ほど教えてもらった後は、

いよいよお楽しみのパーティである。

教会は木材をふんだんに使った懐古的な建物で、机や椅子を隅にどけた大きな部屋に本物の樅（もみ）の木のツリーが立てられいる。それだけでも珍しいのに、銀色の付け髭を輝かせて大きな外国人のサンタクロースが現れるとパーティは最高潮で、小さい子も大きな子も歓声を上げてサンタに群がった。

サンタは皆にサテンのリボンで結んだ可愛らしいプレゼントの包みを配り歩き、シスターたちはにこにこしながら大きなケーキを切り分けた。ケーキを配るのは大きな子供の役割で、指名された志郎はきびきびと皿を配って回る。

パーテイには優菜も来ていた。

志郎は小さい学年の子供から順にケーキを配ってゆく。やがて自分の学年に配り始めた時、皆の期待に満ちた眼が自分を取り囲んでいるのに気が付いた。優菜は一番最後の席に大人しく座っている。目立たないように、静かに視線を落として。

ケーキはぴったり皆に行き渡るように切り分けられていた。これだけの大きさと数のケーキ焼くのはさぞかし大変な作業だったろう。だが、子ども達の瞳の輝きをみて、シスターたちはとても嬉しそうだった。

志郎はいよいよ高学年の一団にケーキを配りはじめた。順に直接手渡してゆく。優菜の近くに座る女子たちは好奇心いっぱいで志郎を見つめていた。その中にははっきりとした挑発の意思が読み取れた。そして、志郎はその意味を正確に理解した。

最後のケーキを優菜の前に持っていったとき、彼はわざとよろけ、皿からケーキを落とした。ケーキは優菜の目の前を通過し、膝をかすめ、床にぼってりとひしゃがる。

「あっ！　ああ……あ〜〜あ」

志朗はおどけて見せる。

「あ〜〜、ダメじゃん、志郎君」

「もったいな〜い、ケーキ、かわいそー」

たちまち女子たちが非難じみた声を上げる。しかし、その中にはかなりの割合で嘲弄（ちょうろう）が混じっていた。

優菜は足元の無残なケーキを見つめている。そして、ゆっくり顔を上げた。

志郎と目が合った時、大きく見開かれたその瞳は虚ろで、別に何者をも映してはいなかった。それが志郎を恐ろしく怯（ひる）ませる。

「な、なんだよ。よろめいただけだろ、睨むんじゃねえよ。おっかねぇ〜」

わざとらしい志郎のいい訳に答えは無い。

「あらあら」

気が付いたシスターが慌てて近づいてくる。しかし優菜はそちらを見ようともせず、床に落ちたケーキを拾い上げて汚れた床をハン

カチで拭いた。そして、まっすぐゴミ箱に向かって歩いてケーキを捨てると、そのまますたすたと部屋から出て行った。

その様子はいかにも自然だった。まるで要らなくなった皿を洗ってきますとでも言うように。だから誰も後を追わず、何も言わなかったが、勿論優菜は二度と戻ってはこなかった。

「……あの子出ていっちゃった……」

「ちょっとかわいそうじゃない？」

ケーキを頬張りながら女の子たちが囁き合っている。

「……でも、いてもしゃべんないしウザイしさぁ……・ねえ、志郎君？」

志郎は何も答えなかった。ただおいしそうなケーキの味がさっぱりわからなくなっただけで。

そんな事があってから、ますます志郎は優菜を毛嫌いするようになった。言葉でからかうと目立つ自分が不利になるため、馬鹿にした表情で無視をするという姑息な手に出た。クラスの皆はそれを志郎が優菜を嫌っているからだとしごくまっとうに解釈し、やがて優菜に挨拶するものすらいなくなった。

見かねた担任が、幾度か学級会で話をして、優菜にも何度か声をかけてくれたようだが、とりあえず無視される以外はほとんど何もされるわけでなく、当の優菜があまりにも無反応な為、あまり効果

はなかったようだった。志郎も様子を尋ねられたが、巧妙に切り抜けた。担任の女教師は気が優しく、確たる現場も押さえていないのに、あからさまに注意ができない。志郎はそのあたりのこともちゃんと承知していた。ただ、自分が卑怯なことをしている感覚は時々心の隅をよぎったが、無理やりそれを押さえつけた。

羽山優菜はこの小学校に四年生の途中で転校してきた生徒だった。学年の途中で転校して来るだけでも割合珍しいのに、少しイントネーションの違う喋り方や、その神秘的――とは言い過ぎかもしれないが、少し冷めたような、妙に悟ったような雰囲気のおかげで、最初から皆にしっくり溶け込めたとは言い難かったのは確かだ。

それでも最初のうちは二クラスしか無いこの学年でも、しゃべり合う友人はいたようだったし、優菜も自分から仲間外れにされるような事をしてはいなかった筈だ。志郎も何度か口をきいた事がある。

四年生の冬、彼女が転校してきてしばらくたった頃の事だ。

「おまえ……なんで髪くくらないんだ？　うっとおしくないんか？」

休み時間にその長い髪を見て志郎は尋ねた。

「別に？　この方が好きだから……ラプンツェールみたいで。」

「……？」

らぷんつぇーるがなんなのか、彼にはさっぱりわからなかったが、当時の女子はほとんど短い髪型にしていたし、長めの子も大概くくるか、三つ編みにしていたから、優菜のおろした髪は目立つな、と志郎は思った。

そういえばいじめが始まったのも、彼女が唯一、自己主張をするかのように下ろしていたその髪が背中の半ばを過ぎた、四年生の終わりの頃からだったように思う。

ごく緩やかにウェーブを描くその髪はひどく美しく、志郎は時々こっそり眺めていた。

一度席替えで偶然、志郎の前の座席に優菜が座った事があり、教室の前の部分を大きく開けて先生が理科の実験を見せていた事があった。

ぎゅうぎゅうと詰まった座席に大きな体で窮屈そうに座っていた志郎がふと手元に眼をやると、優菜の髪が自分の机まで流れているのに気が付いた。

それは窓からの光を密やかに反射し、黒色なのに色々な色が交じり合っているように見えた。

「引っ張らないで！」

トゲのある声が頭の上から聞こえ、はっと気が付いた志郎は、自分が優菜の髪の一房を握ってしげしげ眺めている事を知った。

「あ……」

そんなつもりはなかったのに、初めて優菜がキツイ口のきき方をしたことに志郎はかなり狼狽した。指を離れた髪は微かな香りを放ちながら、音もなくノートの上にこぼれる。

「だって、お前の髪の毛が邪魔でノートがみえねぇんだよ！」

動揺を隠すかのように言い放った声は、思いのほか大きく、クラスの皆が自分に注目している。志郎の顔に血が上った。

「うっとおしいぞ！　もっと前行けよ！」

優菜は黙って席を前にずらし、豊かな髪はすとんと椅子の背に落ちた。クラスがひそひそとざわめいている。

その時、教師がやんわりと注意を与え、その時はそれで収まったのだが、志郎が優菜を目の敵にし始めたのはその頃からだったようだ。志郎の態度の変化は知らず知らずクラスの皆にも影響を及ぼしていくことになる。

やがて学年が上がるにつれ、徐々に小賢しくなった彼等は、優菜が当時、振り込み制ではなかった給食費の納入にたびたび遅れたり、参観日に誰も来ないなどと言うことに気が付き始め、五年生の半ばを過ぎる頃には彼女は完全に孤立していたのであった。

しかし、どれだけ無視をされ、グループ学習のメンバーから一人外されても、優菜は無口でよく勉強し、長い髪を揺らしていた。

六年生の秋には遠足の代わりに修学旅行がある。夏休み前からクラスの皆はワクワクし、二学期になってから事前学習をしたり、夕食のアンケートを取ったりと計画を練っていて、後二週間で待ちに待った旅行の日という頃。

優菜は突然学校に来なくなった。

最初の二日ほどは皆、ただの欠席だと思って皆気にしなかった。だが考えてみれば、今まで優菜はどんなに苛められても学校を休んだ事がなかったので、奇妙と言えば奇妙なことだったのだが。

次の日も優菜は登校せず、四日目になると、クラス中がヒソヒソと噂をし始めた。

「……ちょっとヤバくない？」

「え～、私らのせいだって言うの？」

「関係ないじゃん、口きかなかっただけでさぁ」

「そろそろ先生が何か言いだすよ。もうすぐ修学旅行だってのに、つまんない学活で時間とられんのいやだよねぇ。どっかの班活動に

入れてやりなよ」

「ウチは七人でもう一杯だから。そっちは六人でしょ」

「ええ～、あんな暗い子いやだぁ。せっかく楽しみにしてんのにさぁ」

そんな女子のおしゃべりを聞くたび、志郎はなんともいえない苛立ちを感じた。

授業中幾度も前列の空席に目が行き、どうして先生は何も言わないんだろうと怪しんだ。

その日の夕方。

朝から降っていた雨はすっかり上がり、秋の夕暮れにふさわしい、すばらしい夕焼けが刈り取られた田んぼを照らしていた。そばを走る古い国道を、使いに出された志郎は自転車で走っていた。

田んぼの奥に小学校が見える。校門から伸びる一本の地道を羽山優菜がひとりで歩いていた。ぬかるんだ道を意識してのことだろう、傘は持っていなかったが、赤い雨靴を履いているのがわかる。

志郎は思わずそちらへとハンドルをきった。田の縁を縫うような

畦道に幾つも水溜りができ、夕焼け空を映している。赤く染まった水溜りを乱暴に破壊しながらペダルをこいだ。

後ろから近づいてくる自転車の気配に優菜は振り返った。

「おい」

自転車から降りもせず、志郎はぶっきらぼうに声をかける。

「……」

「なんで、学校来ないんだ？　病気でも無いのに」

答えず、優菜は穏やかに志郎を見上げる。夕日に真正面から照らされて、優菜の体全体がオレンジ色に輝き、黒髪がつややかな栗色に見えた。

「サボリかよ？」

「……関係ないでしょう？」

投げやりな声。その瞳は遠くの空へ向けられ、志郎等、映していない。

その一言に志郎はカッとなった。それがどういう事なのか考える間もなく、言葉が勝手に口から飛び出す。

「関係ないけどな、俺には！　だけどお前がサボっている間、皆迷惑してんだ。お前がいないから修学旅行の班とか、班別行動がちっとも決まらないってな！」

「……まるで私がいない事がとっても大事なように聞こえるね」

「！」

その言葉はひやりと志郎の胸を刺した。優菜がこんな事を言い返すとは、思いもしなかったのだ。ぐぅっと言葉に詰まる。

「冬木君」

静かに優菜は志郎の名を呼んだ。

「なっ……なんだよ！」

「さようなら」

優菜が背を向け、長い髪がふわりと舞った。赤い雨靴がぬかるんだ地道を踏む度にぐちゅぐちゅと音が鳴り、小さな背中が遠ざかっていく。

大人っぽい態度と子供らしい仕草の不思議な調和。そんなものを語れるほど志郎は言葉に長けてはいなかったが、自分が優菜に圧倒され、本当に言いたかったことの最初の言葉すら伝えられなかったことは自覚できた。

学校に来いよ。

次の日も優菜は学校に来なかった。

志郎は昨日のことを思い出しながら、担任が朝の学活をしに教室に入ってくるのをぼんやりと眺め、気の抜けた声で号令をかけた。

「きりぃ～つ……れぇい」

ガタガタガタ。皆が席につく。

「おはようございます。はじめにお知らせがあります。休んでいた羽山優菜さんが、転校することになりました」

「！」

級友たちがひそひそと顔を見合し、中には志郎に話しかける者もいる。だが、志郎は誰の声も聞いてはいなかった。

「みんな静かに。……実は羽山さんのお母さんは一昨日亡くなられたのです。そして羽山さんは、お葬式を済ませて親類の家に行く事になったそうです。昨日、学校に挨拶に来て、皆さんには会えないけれどよろしく、そして、修学旅行を楽しんできてくださいと伝言を貰いました。……残念ですが、羽山さんにとってはよかったかもしれません」

最後の一言はきっとクラスの皆に対する先生の皮肉だろう。自分の大きな心音を聞きながら、志郎はそんな風に感じた。

普通こんな田舎の町では葬式は重要な行事で、近所なら手伝いに行ったり、役持ちの家は受付に借り出されたりとけっこう大騒ぎなる。それが子供とはいえ、何も気がつかなかったということは如何に付き合いの少なかった家とはいえ、何か不自然な匂いがした。後になって聞いたことだが、実際は親戚の意向で儀式らしいものはほとんど行われず、優菜の母はひっそりと役場で火葬にふされたらしい。

『さようなら』

昨日、優菜が言った事はきっとこのことだったのだと、志郎は今更ながらに思いあたった。あれは学校に転校のことを告げに来た帰り道だったのだ。たった一人で。

サボリだなんて、無慈悲な自分の言葉を優菜はどのように聞いていたのだろうか？

母親を亡くしたなんて、どのような心持がするんだろうか？

このクラスに、そして自分に、優菜はなんのいい思い出も無いはずだった。親戚の家に行くことになって今頃ほっとしているのだろうか？

ざわめいたクラスの中で彼だけが凍りついたように動かなかった。

もう確かめようも無い。

行って欲しくはなかったのに。

やっと素直な気持ちが心の中で言葉の形を取った。昨日夕日に染まった小さな背中に感じたのと同じ思い。

何事もなかったかのように一時間目の授業が始まる。

窓の外には昨日優菜が歩き去った道がまっすぐに田んぼの中に伸びていた。

1．　プロローグ　雨上がりの別れ　（後書き）

次項は１０年後の予定です。

2．再会はトワイライトブルー　1（前書き）

前回から十年後です。

2．再会はトワイライトブルー　1

またここに戻って来たんだわ……。

優菜は校門を出たところで振り返り、夕日に照らされた校舎を見上げた。くすんだコンクリートがばら色に染まっている。様々な手続きは既に昨日、市の役場にて済ませ、今日は赴任の挨拶に母校へやってきたのだ。春休みの夕暮れの校舎には子ども達の姿は無く、職員の姿も少ない。

はっきり言ってこの学校にいい思い出などなかった。もっとも、良くも悪くも思い出に耽（ふけ）る余裕もなく、ひたすら生きる為に生きてきたこの年月。この街を思い出す事など無く。

それでもこの地は優菜にとって特別な意味がある場所なのだ。暮らしたのはわずか数年。しかし、ここで母が亡くなった。学校から帰ってみると玄関の上がりかまちで母が倒れており、そのまま病院で帰らぬ人となった。あれは六年生の秋の事。それから直ぐに優菜はこの街を去った。最後の日はきれいな夕焼けで、校舎が真っ赤に染まっていた事を覚えている。

ふと、かつてのさざめきが鮮やかに蘇る。

教室、廊下、窓窓窓。そこかしこで子ども達は笑い合い、軽い足

音を響かせながら駆けまわっていた。そして自分もその中にいたのだった。校舎はほぼ元のままだし、きれいになったプールも嘗ての場所にある。確かにここは自分の母校なのだった。

なにを感傷に浸っているの？　私らしくもない。

優菜は少し普通の子どもとは違っていたのだろう。幼い頃から母子家庭で育った彼女は、余り沢山のコミュニケーション手段を持たなかったのだ。特に右へ倣え式の女の子特有の群れる感覚が苦手だった。別に孤高を気取るつもりも無かったのだが、同じ持ち物も揃えられなかった所為もあって、いつも少し離れて本を読んでいた。そんな彼女をクラスメイト達は子ども独特の感覚で無視をしたり、時にはあからさまに馬鹿にしたりしたのだった。それに対して、おびえて泣いてあげればよかったのだろうが、どっちみちここに住み着くわけじゃないと適当にあしらい、彼等が期待するような反応も見せなかったものだから、よけい苛められたような気がする。

でも、こうして教師となってここに戻ってきたからには、少なくとも自分のような子どもを作らないようにしなくては、とも思う。せっかく難関の採用試験を突破し、こうして就職できた限りにおいて。

私は教師になったのだから。

明日から不動産屋に行って借りれる部屋を探さなくてはならないだろう。元いた長屋はとっくの昔になくなっていたし、母を亡くしたそんなところに住むつもりもない。部屋探しは慣れている。幼い頃から各地を転々とし、自分の家という物を持ったことの無い優菜

にとって、それは別に特別なことではなかった。

とり合えず、このまま駅にとって返し、買い物でもして今住んでいる隣町の部屋に帰り、遅い夕食でも整える以外にする事がなくなった。それでいい。明日から忙しくなるだろうから。優菜はゆっくりと来た道を引き返す。

校門から伸びる一本道はかつては広い地道であったが、今ではアスファルトが敷かれ、路肩にガードレールも設置されている。しかし、両側の田んぼはまだ健在で、その間を縫うように水路と畦道が走っている。向うには小高い丘が黒くなずんでいる。確か史跡に指定されている筈だ。のどかさはまだまだある。そうは言っても月日の流れは明らかで、建て売りと見られる住宅の群れが駅の方角から押し寄せてきていた。

ゆるく頬を撫でる風は昼頃は春の匂いを運んできていたが、日が落ちる寸前の今ではぴりりとした冷気を含んでいる。

優菜は長い影を引きながらゆっくりと歩いてゆく。

三月末日。春、未だ浅き夕暮れだった。

3．再会はトワイライトブルー　2

志郎は軽トラックのエンジンを止めて、小学校の校門にたたずむ細い人影を振り返った。

人影はこちらに背を向けている。長い髪の若い女性であることだけはわかったが、空気には早春の靄（もや）がうっすらと含まれ、距離もあるため、誰かまでは判別できない。しかし、どこかで見た風景だと思った。

♪♪♪

その時、志郎の携帯が賑やかな音を立てた。車の音にかき消されないよう、音量は常に最大にしてある。常に得意先からの電話が頻繁にかかってくるからだ。急いで携帯を取りだすと画面には頼子（よりこ）の名前が表示されていた。

頼子とは小、中学校の同級生で、付き合い始めたのは彼が大学を卒業して地元に戻り、家業を継いでからだったから、現在でほぼ一年になる。

彼としてはせっかく都会の大学に行ったのだから、そっちで就職したい気持ちが強かったのだが、中々そんなわがままも許されない家柄だった。地元に戻った当初退屈していた志郎に声をかけたのは、

頼子の方からだった。

「俺。なに？　まだ配達中なんだ」

ややもすれば無愛想とも取れる口調で志郎は電話に出た。

『あ、そう？　ごめん。シロちゃん、今日会える？七時ごろならいけるかな？』

甘えるような、明るい声。いつもより少しだけ早口になっている。志郎の不機嫌を敏感に読みとったのだろう。

「なんで？　お前、残業だって言ってなかったか？」

『うん、ちょっとムカつくことあって、定時で上がるつもりなんだ～。ねぇ、ご飯食べようよ。せっかくの金曜日だし』

「腰掛ＯＬの言いそうなことだよな。こっちは後五軒も配達あって、最終は倉山田町まで行かなきゃなんねぇんだぜ」

倉山田町とは国道沿いにある隣町のことだ。駅から遠く、老人も多いので、車による配達手段が欠かせない町である。

「多分七時過ぎるぞ」

『いいよ。待ってる。終ったら連絡ちょうだい？』

「ああ、わかったよ……」

無愛想に切った携帯をベンチシートに放り出し、志郎はもう一度

窓の外に目を凝らした。黄昏はさらに濃くなり、人影は俯き加減に一本道をゆっくりと歩き出した所だった。

まさかな……

ばかばかしい感傷を振り払い、再びエンジンをかける。ぶるん、と小さなトラックはひと震えして、走り出した。ドアミラーに人影は赤い校舎を背に小さくなってゆく。

田端頼子は乱暴にロッカーを閉めて、廊下に出た。とたんに同僚の尾形里美（りみ）に出会ってしまった。生真面目な彼女は今、頼子が最も出会いたくない相手だった。

「あれ？　田端さん、帰るの？」

「帰るよ？　帰っちゃ悪い？」

頼子は里美の目を見ないようにしてつっけんどんに答える。ここで大抵の人間はテキトウに答えてやり過ごすのだが、頼子のワガママで残業のあおりを食らってしまった里美は皮肉の一つも言いたい気分になっていた。

「まあね、田端さんに任せていちゃ、いつまでたっても見積書はで

きそうにないしね。でもさ、自分が二箇所も計算まちがいしたんだから、いくら縁故就職でもあの態度はまずいよ。」

あの態度とは、ミスを指摘した三年先輩の同僚に口答えした挙句、今日は頭痛がするので帰りますと、相手の答えも待たずにオフィスを飛び出した事を指している。その見積書は至急扱いで、明日の朝一番で先方に届けなくてはならず、同輩の里美におハチが回ってきてしまったのだ。里美の皮肉はここにある。他市からきた里美からすれば、地元出身で短大卒業後特に就職活動もせず、叔父の会社に勤めている頼子の事は、あまり好きになれない年下の同期だった。

「いいの！　とにかく今日は頭がいたいの。じゃ！」

ついさっきオフィスを飛び出したのとまったく同じ態度で、頼子は踵を返し、ちょうど止まったエレベーターに飛び乗った。

あ～、うっとおしい。なんで誰も彼もこんなにうっとおしいのかしら？

さっきの志郎の電話の態度もよろしくなかったし、計算間違いを指摘した先輩も、わざわざ嫌味をいいに来た里美も憎らしい。五人乗りの小さなエレベーターにたまたま乗り合わせた違う会社の中年社員にすら苛立ちが募る。なにより、こんなにいらいらしている自分に一番腹が立った。

なにさ、シロちゃんなんて最近すっごいテキトウな態度だし。いくらお店を拡張するんで忙しいったって、彼女をないがしろにしていいわけ？　はじめの頃はあんなに優しかったのに……！

エレベーターが開くと頼子は後も見ずに、街路へと飛び出した。

地方都市とはいえ、一応県庁所在地であるこの街のメインストリートだ。金曜日の夕方のことで人通りは多い。ここから私鉄で頼子の町まで二十分、六時前には家に帰れる。久しぶりにオシャレをして着飾って志郎を待とう。何ならもう一度こっちへ取って返して、最近できた洒落た居酒屋に繰り出すのもいい。そう決めると少し気分も晴れやかになるように思えた。

もうすぐ爛漫の春なのだから。

4．再会はトワイライトブルー　3

優菜が時計を見ると、既に六時を大きく過ぎ、春の宵が窓の外に広がっていた。明るい職員室から見れば、まだ山の端（は）に残る夕陽も少し頼りないものに見える。

新学期が始まって一週間が経つ。今年度新規採用の優菜は、五年生三クラスの内、二組の担当となっていた。

大学を卒業して一年間、非常勤講師として二つの小学校をまわった優菜だったが、年度当初から学級の受け持ちは初めてだった。しかも、五年生という、そろそろ自我の目覚めに近づいた子ども達の担任は、まったく初めてだったので、いろいろと神経を使う事が多く、くたくたになった七日間だった。

始業式の日はさすがにクラス替えしたてだし、新しい担任にも興味があったしで、少しはおとなしくしていた子ども達だったが、次の日にはさっそく、本領を発揮してやりたい放題をしてくれた。

この一週間で、ずいぶん喉を痛め、声が枯れてしまったような気がする。学力的には昔も今もさほど悪い校区ではないが、普段の男子達のの活発さは想像以上で、タン瘤、打ち身、擦過傷は日常茶飯事だった。

そして、ようやく週末だと思った今日、一人の男子児童が昼休みに階段の手すりを駆け下りると言う離れ業に挑戦すると言う事件があった。彼は普通の元気な児童で、転がり落ちた弾みに目の上を切り、本人が驚くほどの血が出たので、保健室の養護教諭が公用車で近くの病院に搬送する騒ぎになった。

結果は大したことはなく、ボクサーのように目の上に強力なバンテージが貼られて帰ってきた。目と言う事で優菜は非常に心配したが、本人はケロリとしており、かえってハクがついたように威張っていた。放課後自宅に連絡した後、何を言われるかと戦々恐々で、教頭と共に児童を保護者宅まで送っていったのだが、昔は農家をしていたと言うその家の祖父がのしのしと出てくるなり「このバカもんが！」とゲンコツを孫にお見舞いし、せっかく立ち直っていたその男子が大泣きをする始末で、大いに狼狽させられた。

結局、彼の母親や祖母、そして奥にいた曾祖母まで出てきて迷惑をお掛けしましたとひたすら謝られ、とり合えず事なきを得た。

帰りの道中、教頭に「いい校区ですね」と優菜が言うと、教頭は確かにそうだが、昔堅気の人が多く、いい時はいいが、一旦こじれると中々信頼を取り戻せないと言った。

「見た感じが全てではありませんよ、羽山先生」

「それはそうですけれど……」

いじめられた経験のある優菜にはよく分かる理屈だ。

聞くと、新興住宅地に住む比較的若い夫婦達の子女と、昔ながらの住民の間に考え方の食い違いがあったり、あるいは、意思の疎通が

まったくないという、ベッドタウンにありがちな問題が矢張りあるらしい。

「本校の児童も多かれ少なかれ、そういった親たちの影響を受けるため、地の子と新興住宅地の子とでは、なんとなく雰囲気が違うんですよ」

まだ四十台の若い教頭は難しい顔をした。

それは何となく感じていたので優菜も頷く。そんな彼女に、教頭は、何か問題が起こり、対処の仕方によっては、親たちの攻撃の矛先がこちらに回って来る事もあるから気をつけなさいと重ねて言った。

言われなくとも優菜には充分心当たりがある。転校してきて、目立たないうちはよかったが、少し皆と違うことをしたり、言ったりしたらとたんに仲間外れにされた。自分は別に悪めだちするほうではなかったが、それでもすかしているだの、暗いだの散々陰口を叩かれたものだ。そんな気質が今でも続いているのだと、少し、げっそりした気分になる。

子どもの考えることなんて、基本的にそんなに変わったりしないのだわ……。ともあれ、今週を何とか乗り切ることができた。

職員室に戻ってきた優菜は、ほっと大きく息をついた。

「お疲れさん」

コーヒーを差し出したのは同じ学年の藤木悠介だ。彼は三組の担任で、体育主任でもある青年教師である。

「初めは皆そうだよ。一生懸命なのはいいけど、力の抜きどころが掴めなくて、どっと疲れるんだ」

「そうですよね」

コーヒーを受け取って一口啜りながら優菜は力無く笑った。確かに抜けるように疲れていた。明日も早いし、早く家に帰って休みたい。だが、まだ今日提出分の、宿題のチェックがある。来週の授業の準備も。学級担任の仕事には終わりが無いのだ。

「それでも今週は何とか終わったじゃないか。向こうでは飲みに行こうとか言ってるよ」

決して無事とはいえない最初の一週間だったが、ベテランの学年主任曰く、「終いにはなんとかなって」ようやく金曜の放課後を迎える事ができたのだ。藤木の言う通り、低学年担当の教諭の間では飲みに行こうかという声も上がっていた。

「俺は行こうかと思ってるんだけど、羽山先生もどう？」

「私は……」

誘われるのは嬉しいが、本当に疲れ切っていて楽しめそうにない。どうしようかと思っていると藤木がにやりと笑った。

「いいんだよ、無理しなくても。へとへとなんだろ？又今度って事で」

「……はい……そうします」

優菜は重ねて誘われなくて済んでほっとした。流石に教師の観察眼である。素直に助言に従う事にし、宿題のノートだけ持って帰る事にする。授業の準備は来週早く来て行う事にした。

「ありがとうございます。また……誘ってください」

「勿論」

優菜は酒は量は飲めないが、どちらかと言えば好きな方だ。だが、さほど親しくない複数の人間とワイワイ飲むのは苦手だった。今は昔と違って、付き合いも自分なりに学習し、テキトウな相槌もお愛想笑いも上手になったと思う。しかし、基本的に自分は社交辞令とか義理と言うものが苦手なのかもしれない。

「今日はもうお帰り？　宿題のチェックなんて来週早くにやればいいさ。いい仕事するには元気なのがいいんだ」

藤木はそう言って席に戻って行った。優菜は黙って荷物をまとめる。教師は基本的に明るくなければ子ども達をひきつけられない仕事だから、子ども達の前では自然に明るく振舞える。好きな仕事だし。だけど、今日のように疲れきっていては、この上お愛想笑いはうまくできそうになかった。

ノートの束を包んで大振りのショルダーに放り込み、挨拶をして暮れなずむ戸外に出る。まだどうにか日の光が残っている。すぐに消えてしまうだろうけど。

すうっと風が通ってゆく。春の歩みが今年は遅れていると朝のニュースで報じられていた。何時もなら満開の桜が今年はまだ七分咲

きというところだ。

「さむ・・・」

今日は駅前のスーパーでお惣菜でも買って帰ろう。湯豆腐もいいかな？　ゆっくりお風呂に浸かって寝て、持ち帰りの仕事は明日すればいいわ。

優菜は校舎の裏から自転車を引っ張り出し、校門を出た。一本道の正面の山際に夕陽がまだ引っ掛かっている。明日も晴れそうだ。

5．再会はトワイライトブルー　4

駅に程近い商店街。ここにはこの街で一番賑やかな場所だ。そして駅前出口で一番大きな店が、多目的酒店、「リカーショップ・トオキ」である。商店街の出口からほんの少しで駅前ロータリーに出るので、アーケードの中は買い物をする人や、通勤通学で駅へと向かう人たちで常に人通りがある。

最近、駅ロータリーに面した所に中規模のスーパーやコンビニが出来て商店街の店主たちは商売敵が出来たと思っていたが、商店街には相変わらず地元の人たちが買い物にやって来る。そしてスーパーには新興住宅街の人が出向くようだから、これでなんとか均衡を保てているようだった。

そんな中でも志郎の店は常に客足が途絶えない。ここには酒だけでなく、飲料、調味料の類のほかに乾物、菓子など、生鮮食料品以外は大抵置いてあった。特に新しく始めた輸入物のチーズやワイン、ソースは品ぞろえが豊富で、都会のデパートまで行かずとも地元でしかも割安で購入できるとあって、地域を問わず若い女性達に好評だった。

冬木家の元々の家業の造り酒屋はいまだ健在で、祖父の代の人々が山手の店で頑張ってはいる。しかし、ここ十数年の日本酒の需要は落ち込む一方で、江戸時代から代々続いた銘柄ではあったが、これ以上の事業拡大はまず無理と感じた志郎の父が２０年前から商店街で小売業をはじめ、それが今の「リカーショップ・トオキ」なの

だった。駅前本店は四階建てで七年前に建てた持ちビルである。

商売は順調で、今では支店を近隣の町に数店舗持つまでになり、五年前には株式会社として発足した。そんな訳で、次男坊で都会の大学で気楽に全然毛色の違う分野を専攻していた志郎を卒業を期に地元に呼び返したのだ。頭もよく顔も広い志郎に実地に営業や経営を学ばせながら、店の拡大を計ろうと、冬木家では考えたのである。

「ちょっと、何で勝手に決めるの！？　前からご飯食べに行こうって言ってたじゃない！」

店の裏手にある小さな事務所に頼子の不満の声が響く。裏口の搬入スペースにはまだバイトの連中がいる筈だ。きっと聞かれているだろう。志郎は溜息をつくとデータを保存してからパソコンを落とした。

「言ったさ、言ったけど疲れてるから。県庁くんだりまでは行きたくない」

「だって、せっかく予約取ったのに。中々取れないんだよ？あの店」

「そお？」

志郎は頼子を適当になだめながら普段着のジャケットを羽織った。兄には休みを貰ったのだが、本当に疲れていて、頼子の言う、県庁の近くに出来たオシャレなフレンチレストランなどに行きたくなかった。どうせ、草食動物が食べるような見たこともない野菜がひとつまみと、ひとかけの肉が不自然に大きな皿に乗っかって出てくる

だけに決まっている。酒だって平凡なワインを馬鹿高い金を払って飲まされるだけだ。第一これから着替えて電車に乗るなんて真っ平である。と言って車で行けば、それさえも飲めない。そんな男の心情が頼子にはわからないんだろうか？

つまらん。

志郎は思った。休日前ならいざ知らず、疲れきった金曜の夜になんでそんなもん食わないといけないのか。第一まだまだ夜は冷えるのだ、こんな日は焼酎の湯割りに決まっている。肴は脂っこくて甘辛い、健康に悪そうなものがいい。この街の駅通りだって結構人通りはあるし、古いが旨い店だってある。

「ねぇ、シロちゃんってば！」

「そんなに行きたいんだったら自分で行けよ。誘う友達ならいっぱいいるだろう？」

「私はシロちゃんと行きたくて予約取ったの！」

頼子は中々譲らない。よほど楽しみにしていたのだろう。志郎はうんざりしてきた。

やや明るめの茶髪の前髪をサイドから横にひっぱり、セミロングの巻き髪を今風にまとめた頼子は連れて歩いて見栄えのする女だった。まだ肌寒い四月はじめの宵だと言うのにヒップハングのダメージジーンズにきらきらしたベルトを二重に巻きつけている。トップはフリルの付いたシャツに、ボアの付いた短いサテンのダウンジャケットを引っ掛けている。

自分は冷たいんだろうか？およそ暖かそうとはいえない、都会風の装いに身を包んだ頼子をちらりと見て志郎は思った。

『冬木くん、私と付き合おうよ』

一年前、大学を卒業して家業を継ごうと決め地元に帰ってきた時、中学校の同窓会で再会した頼子にそう言われて、志郎は軽く「いいよ」、と言ったのだった。

ちょうど付き合っていた彼女とも別れたところだったし、流行の服をセンスよく着こなした頼子はとても見栄えがした。明るくて、よく笑い、彼女にするには申し分ない異性だった。事実付き合い始めた当初は楽しかったし、地元に残っている友人達からは羨ましがられたものだ。

だが、最近志郎は、そんな頼子の心に寄り添えない自分を自覚している。

このまま行けば確実に自分は頼子に掬(すく)い上げられてしまう。頼子の家も地元ではかなり大きく、分家だが、親戚は会社を持っており、両方の親もこの付き合いを好ましく思っている。頼子の親にはさすがに会ったことはないが、しょっちゅう遊びに来いと誘われているし、このまま行けば、頼子の敷いたレールに組み込まれ、結婚させられるのは確実だった。

頼子とはそんな風になりたくはない。ただ付き合って楽しければ

い。そう思うのは本気で愛していないからだ。学生時代に付き合ったどの女性ともこんな風だった。自分は冷たい人間なんだろうか？

そんな風に考えると志郎はますます気が滅入った。

「わかったよ……じゃ行こう」

夕暮れの駅前通り。家路を急ぐ人々が通り過ぎる中、志郎は一人、心の底を寒くしていた。

ロータリーのスーパーは混んでいて、惣菜類も殆んど売り切れており、優菜は仕方なく、改札前のコンビニで弁当を買うことにした。これはあんまり使いたくない手段だったが、自分で作る気力が無かったのだからしようがない。

ついでにちょっとおしゃれなデザートでも買おう。春の新作も出ている頃だろう。そう決めて、優菜は手ぶらでスーパーを出た。面倒なのでス自転車はスーパーの駐輪場に置いたままにする。コンビニはスーパーよりもさらに駅近にあり、ほぼ改札のまん前だ。この付近のコンビニはここだけだったから、いつも結構賑わっている。急がないと弁当がなくなるかもしれない。優菜は早足で歩き出した。

「あ、すみません」

自分の抱えた大きなバッグが、前を行くカップルの男性の腕にあ

たってしまい、優菜は無意識に謝った。

「あ……おい！　ちょっと待って」

急に呼び止められて驚いた優菜はその顔のまま振り向いた。そこには背の高いがっしりした男性が、細い女性に腕を取られながら自分をじっと見つめていた。

「やっぱりそうだ……お前、羽山優菜だろ？」

6．再会はトワイライトブルー　5

頼子に腕を引かれて歩いていると、ぱすん、と志郎の腕に大きなショルダーバッグが当たり、長い髪の女性が急ぎ足に歩きながら謝った。

「あっ……すみません」

その時なぜ、彼女に気が付いたのか志郎は説明できない。

しかし、街灯に照らされた小さな背中を見たとき、志郎は何故だか確信に近い思いに突き動かされ、「待て」と声をかけたのだった。

通り過ぎようとしていたその女性が肩を竦め、髪をふわりと弾ませながら振り返るのを、まるでスローモーションでも見るように志郎は見ていた。間違いなかった。

「やっぱりそうだ……お前、羽山優菜だろ？」

「……え？」

優菜は突然自分の名を呼ばれて酷く混乱した。

この町に知り合いなどいない筈だ。十歳から十二歳までの二年余

りを過ごしたが、特に親しくしていた大人も子どももいない。当時の同級生や近所の人は優菜のことなど覚えていないだろうし、実際優菜も誰のことも思い出せなかった。勿論、彼女を呼び止めたこの大きな男性の顔も記憶に無い。

なのに、何故？

「……覚えてないんだな、その様子じゃ」

志郎は面白くなさそうに優菜を見つめた。少し波打つ長い髪。細い肢体におとなしい色合いのツインニットと黒いパンツという何処にでもいそうな若い女性。だが、彼女だと直ぐに分かった。記憶に残っている少し神秘的な雰囲気。

羽山優菜だ。

優菜も自分の目の前に立ちはだかっている男性を不思議そうに見ている。コットンタートルのシャツにごついジャケットを無造作にひっかけた長身の男。大きなベルトのバックルが自分の腰よりかなり高い位置で鈍く光っている。彫りの深い意志の強そうな瞳、今はやや顰められている、形のいい眉を。

なんで？　名前を知ってるって事はもしかして昔の同級生？でも私、男子が苦手であんまり誰とも口をきいたりしなかっ……

「……あ！？」

思わず小さな叫びが口から飛び出す。記憶の底からふいに湧き上がってきた思いがある。それは、ひどく苦い味を含んでいた。

「思い出した？　そう、俺。冬木志郎」

トウキシロウ？　トオキシロウだって！？　トオキ……

きっと優菜が嫌な顔をしたのだろう。まるで鏡に映したかのように目の前の男も険しい顔になった。

「……」

そうだ。その名には確かに覚えがあった。自分がこの町にいい思い出がなかったのは大部分、トウキシロウ（漢字は思い出せない）という嫌な男子生徒のおかげではなかったか？

「ちょっと、シロちゃん、誰？」

隣で不満そうな顔をしていた頼子が少し声を高めて聞いた。

「あ……ああ、お前覚えてない？　小学校の五、六年一緒のクラスだったろ？　確か……秋の修学旅行の直前に転校したんだったよな？　羽山……優菜サン」

名前のみならず、細かいところまで覚えている志郎に優菜は益々驚き、思わず僅かに半身を引いた。志郎はそんな優菜から目を逸らさない。

「ええ〜〜〜？　そうだっけ？　ゴメン、私覚えてない」

思いがけない志郎の説明に、頼子は頼子は大きな目をまん丸にし

て優菜を見つめた。

「えっとぉ〜〜六年の時って……」

「……」

優菜は非常にいたたまれない気分で突っ立っていたが、全に忘れ去っていた嘗てのクラスメイト達に取りあえず軽く会釈をした。だが、内心は早くこの場を立ち去りたい気持ちでいっぱいである。頼子は可愛らしく、小首を捻っている。

「思い出せないや……」

「……調子いいよな、俺等、寄ってたかってイジメてたんだぜ。羽山さんのこと、俺は覚えている」

「ええ〜、イジメぇ？　私そんなことしたかなぁ……」

本当に思い出せないらしい頼子と、苛立ったように自分を見ている志郎。どちらも優菜にとって、何の関係もないし、どうでもいい存在の二人だった。ここ等が去り際だろう。

「……じゃ」

短く挨拶すると作り笑いで踵を返し、急いでいる風でコンビニへ向かう。一件落着。もう声などかけては来ないだろう。だが――

「待てって！」

えっ！？

さっきふいに名前を呼ばれた時よりも、もっと驚いて優菜は愕然と志郎を見上げた。がっしり腕を掴まれている。その力強さは軽い恐怖を優菜に呼び起こさせた。

なにこの力？　なんで……？

「羽山……さん、なんでこんなとこにいんの？」

密かに慄(おのの)く優奈を無視して志郎は一方的に話しかけてくる。

「……な、何って……」

「仕事？　そのなりじゃ仕事だよな？」

「え……ええ、まぁ」

誤魔化そうにもその暇が無い。取りあえず頷いて見せたが志郎はまだ解放してはくれなかった。

「へえ、やっぱり。な、どこに勤めてんの？　それとも出張？　羽山、さん……よかったら教えてくれよ」

「……」

にこりともせずに志郎が畳みかける。すごく言いにくそうにサン付けで呼ぶのもなんとなく気に触った。勤め先など言いたくない、言いたくはないが、目の前の男の様子は、適当にやり過ごせる雰囲気ではなかった。

「……く、葛ノ葉(くずのは)小学校……」

いかにもしぶしぶと言った様子で小さく優菜が答えた。

「え！？　それって俺等の出身校じゃん。あ！　……ひょっとしてセンセイ？」

「あの……離して……腕」

「え？　あ……ああ、ゴメン」

慌てて志郎は優菜の腕を離した。急に圧迫が無くなり、その開放感が優菜に自分を取り戻させた。

「悪いけど私、急いでいるの。ごめんなさい。じゃあ！」

今度こそ有無を言わさず優菜は身を翻(ひるがえ)し、駅の方向に走った。

「なに？　アレ。感じ悪い人ねえ。シロちゃん、私、今の態度で少し思い出したかも。そういえば小学校の時、少しだけいて嫌われてた人、あの人だったような気がする。暗くて、アイソなくてみんな嫌ってた」

「……暗くてアイソなきゃ嫌うのかよ？」

志郎は苦り切って言った。

「そういう訳じゃないけど……あんまり良く覚えてないし……きっとネクラで変わった人だったんだよ。今もそんな感じだったし……そう言えば、シロちゃんだって率先してイジメてなかったっけ？」

「……」

頼子のその問いに悪意はない。しかし、それだけに志郎は自分のしたことを頼子にさえ覚えられていたのかと、言葉に詰まった。

「でしょ。まぁいいじゃん。昔のことなんだし……あれ？　なんか小学校のセンセイとかって言ってなかった？　災難だね、子ども等も。あんな暗い先生でさ」

「……違う……俺は……」

何でこんなに動揺しているんだ！　俺は。

志郎は立ち止まったまま前を見据えている。人影にまぎれて優菜の姿は既に見えない。

「え？　何？　……って！　早く行かなきゃ、予約の時間ギリギリだよ～！　私等も行こう！」

もどかしげに心を探り、自分の感情を見極めようとしている志郎に気づかず、頼子は明るく彼の腕をとった。

コンビニに駆け込むと、優菜は用もないのに一番奥の棚の後ろに行き、下の棚の商品を物色する振りをして屈みこんだ。

なんで、私がこんな……気まずい思いしなくちゃならないの？別に悪いこともしてないのに……早くお弁当を買って帰りたいだけなのに……

訳もなく腹が立ち、こめかみがドキドキと脈打つ。さっきは狼狽のあまり思考が言葉の形を取らなかったが、今はふつふつと沸いてくる嫌な感情をじっくり確認する事ができた。それは不愉快な感覚であった。

トウキシロウ……トウキシロウ……確か家がお金持ちで、いっつも自信たっぷりで、私のことを馬鹿にしていた男子だ。　クラスのリーダーで、なんでもできて、人気があって、でも、根性の汚いヤツだった。教会のクリスマス会でわざと私のケーキを落としたり……

忘れ去っていたとばかり思っていた苦い思い出が、自分でも不思議なくらいに次々と蘇る。

目の前をゆっくり滑り落ち、床にひしゃげてしまったケーキ。それを捨てた自分。みんなのひそひそ笑い。泣くのを堪えて走って帰った家路。

キライよ、大嫌い。あんな酷い奴。なんで今更私の前に現れるの！？

ここが屋外なら唾を吐きたいくらいの苦い味が口腔に広がるのを噛みしめながら、優菜はゆっくり立ち上がった。

だけどもう、どうだっていい。全部昔のこと。バカバカしい。何を動揺しているの？　私は私だわ。どうせ、もう会うこともない。

冷蔵棚のドリンク類を眺める。好きなレモン味のスポーツドリンクを一つ手に取った。

……でも、本当にそうだろうか？　この小さな田舎町だ。まだ来て二週間もたっていないのに、もう同級生に出会ってしまった。この調子ではいつ何時、偶然に昔の知り人にばったり会うか、知れたものじゃない。しかもさっきは、ついうっかり、勤務先まで教えてしまった……。

この間、教頭に古い気質が残る土地柄だと注意されたばかりではないか。まさか、かつてのクラスメイトの全員がこの町に残っているわけではないだろうし、まだこの歳では自分が担当する小学生児童の保護者になってもいないだろうから、保護者としてまみえる訳でもない。そんなに気にすることではないかもしれないが、道端や、商店でばったり……なんて可能性は大いにある。現にちょっと金曜日の混みあう駅前とはいえ、この始末だ。

しかも、自分は誰一人として顔を覚えていない自信がある。なのに向こうはあのトウキシロウのように物珍しさから、自分を覚えているかもしれないのだ。

「冗談じゃないわ」

気をつけよう。幸い校区に部屋を借りてはいないし、行き帰りは自転車で帽子を被れば誰だかすぐにはわからないわ。

優菜は弁当の棚のところに行って不必要に時間をかけ、ゆっくりと選んだ。ついでに「新製品！」と書かれたスイーツも籠に入れ、レジを済ませた。そして、恐る恐るドアを押し開けると、そこにはもう彼等の影はなく、灯り始めた街灯の下を帰宅を急ぐ人たちが行き交っている。

既に夕焼けの最後の残り陽も消え、春の夜がゆっくりと始まろうとしていた。

7．チャコールグレーの心模様　1

頼子はベッドの中で昨夜の事を悶々と反芻（はんすう）していた。

晴れた土曜の昼前だと言うのに、今日は行く当てもない。志郎は今日も仕事だと言う。まぁ、酒屋の仕事に土日はないんだろうけど、自分としては大変不満だ。一応店としての休みは木曜と言うことになっているが、実際には休みの日も志郎は飛び回っている。会うとしたら昨日のように、志郎の兄に許可を取って早めに上げてもらうか、よほど早くから予定しておかなくてはならない。

あれから電車に乗って、県庁近くにあるフレンチレストランへ行ったのはいいが、何を話しかけても志郎は何か考え込んでおり、いつもよりさらに上の空だった。相槌を打つ振りすらせず、終始ぼんやりと、何を食べているかも気が付かないようで、頼子は終いには話しかけることすら空しくなってしまったのだ。

レストランを出て、このまま一緒に夜を過ごしてもいいと伝えたのに、志郎は明日も早くから仕事だと、食事を終え、頼子を送るとさっさと帰ってしまった。勿論別れ際のキスすらない。

ひどい……ひどすぎる……

頼子はきつくシーツを握った。しかし、いくら冷たくされても、

彼女は志郎が好きだった。小学校の時からずっと。

なんで……なんで私が、こんなにつれなくされなくっちゃいけないんだろう？　腹が立つ……今まで男に冷たくされたことなんてなかったのに……アイツ、ひょっとして私に飽きた？　いーや！　そんなこと無いわ！きっと忙しすぎて気持ちが弱っているだけなのよ。私がもっと辛抱強くしなくちゃいけないんだ。

頼子は自分の考えに無理やり蓋をする。

そうよ！　責任感の強いシロちゃんの事だから、仕事が忙しくなって、責任感じてストレス溜まってるのかもしれないし……プライド結構も高いし、あんまりしつこ過ぎない方がいいのかもしれない。それに意外と旧式なトコあるから、あんまり軽いと思われるような格好とか、言葉遣いとかしないほうがいいのかもしれないな……

今までは東京の女をいっぱい見てきたヤツだからって少し派手目に振舞ってきたけど、ここらで軌道修正するかな？　……まったく、シロちゃん、アンタ難しいよ。でも、その内私をもっと好きにさせるから……。去年再会してから絶対コイツにするって決めてたんだから！　そんなに簡単に引いちゃうなんて絶対できない……！

頼子は勢いよく布団を剥いだ。ベッドの脇の棚には志郎と撮った写真が幾つか飾られている。その内の幾枚かは地元の古い友人達と一緒だった。

当時小学校は二クラスしかなかったので、みんな一緒の感じが強かった。中学になると、地域のもう一つの小学校と同じ中学校の校区になり、当然クラスも増えたので二人の間は以前より遠のいた。それでも、体格が良くて、勉強もスポーツもできる彼は女子達の憧

れの存在で、頼子はなんとか彼の近くにいようと、無理をして同じバスケット部に所属したり、委員会も一緒になったりした。

しかし、志郎は特に一人の女子と親しくするわけでなく、広い交友関係を楽しんでいたので、頼子もせいぜい親しい女友達ぐらいの位置で満足するしかなかった。

その後、高校は別々になってしまい、更に志郎は首都圏の有名大学に進学したため、一旦頼子は志郎を諦め、高校の先輩や、バイト先で知り合った男の子と付き合ったりと適当に遊んでいた。そして親戚絡みの地元の中堅企業に就職して、大きな不満は無かったが、平凡な毎日だった。

だから、思いもかけず、地元に帰ってきた志郎と付き合えることになって、頼子は有頂天になっていたのだった。都会帰りで見栄えがし、金持ちの次男である志郎は自慢の彼氏だった。これはもう決めるしかない、そう思って付き合ってきたのに。

とり合えず、昨日志郎が上の空だったのは、駅前で会ったあの子のせいだ……でもなんで？

訳が分からない。

小学校の時、二年ほど一緒で六年の途中で転校してしまったという、同級生、羽山優菜。

実は昨日帰ってきてから、頼子は押し入れから卒業アルバムを引っ張り出してみたのだが、二学期の途中で転校してしまった彼女はぎりぎりでクラス写真に映ってはいなかった。修学旅行も一緒に行ってなかったから、スナップ写真すらない。かろうじて見つけた春

の校外学習の集合写真はひどく小さく、はっきりしない。無論親しく口をきいた覚えもない。

だけど……彼女は確かにいた。そしてあの志郎が頼子が驚くほどの執着を示したのだ。

そういえば確か、これ見よがしにきれいな髪をかき上げたりして、なんかみんなでムカつくとか言われてた子がいたっけ？　雰囲気が都会っぽくって、クラスのみんなから浮いていたような……？　ぜんぜん明るい子とかじゃなかったし……。

でも、なんでそんな子の事を、ほんのちょっと見ただけでシロちゃん、すぐ思い出せたんだろう？　あの子自身だって言われるまで忘れていたようなのに……自分がイジメてたから覚えていたんかな？

きっと六年の時、何があったんだろう。シロちゃんは人気者だったから、きっと皆が知らない所で。だけどそれだけじゃ……あんなに拘るかな？

頼子は珍しく考え込んだ。暫くしてから起き上がると枕元に放り出していた携帯を手に取り、小学校以来の友人を呼び出した。

「あ、なるみ？　今いい？」

『いいけど何？』

「あのさぁ、トートツなんだけど、小学校の時一緒だった羽山優菜ってコ、覚えてる？」

『ええ？　何？　誰って？』

「ごめん。でも思い出して欲しいんだ。なるみ、記憶力いいじゃん。羽山優菜だよ」

『ハヤマユウナ……』

電話口の友人は考え込んでいるようだった。

「うん、昨日偶然駅前で会っちゃってさぁ……なんだか気になって……」

『へぇ〜〜……そういえばいたかも。そんなコ。ちょっと名前が珍しいから思い出した。……でも、確かすぐ転校したような……』

「どんなコだったっけ？」

『さぁ〜……目立たなくて……いや……目立ってたんかな？　なんか、ちょっと雰囲気が私等と違ってたような……だからかな？　結構シカトとかされてなかったかな

「そうそう、暗いコだったよね？」

『暗いっつか、あの時分にみんなに無視されたら誰でも暗くなるって……実は私は嫌いじゃなかったんだよね、今思い出すと。……でも、なんでさ？　今頃』

「いや……だから、昨日偶然会っちゃって……なんか、ウチらの小学校に今いるんだって。センセなんだって」

『へえ〜〜』

「でもなんか、感じ悪くてさぁ」

頼子は声を尖らせた。

『ふぅん。でも、珍しいね。ヨリが冬木君以外の話題で電話してくるなんてさ』

「……そっかな」

『うん、どう？　仲良くやってるんでしょ？　プロポーズはまだ？』

「何言ってんの～、そんな話はしてないよ～今のところ」

『けど、ヨリは早く結婚した言って言ってたじゃん』

「そうだけど……私らまだ二十三だよ。モット遊びたいよ」

『まーね。で、　今日はヒマしてんの？　デートは？』

「なし。忙しいんだって」

『そ、でもいいよなあ。地元の名士どおしの付き合いだもん。前途洋洋だよね』

「そんなの関係ないよ。そうだ！　ヒマだったら、今日どっかでご飯でも食べよっか？」

誰かにもっと話を聞いて貰いたくて、頼子は勢い込んで言った。

『へへへ～、こっちはこれからデートなのだ』

「あ、そうなんだ～、その内ゆっくり聞かせてよ。又連絡する。じゃあ」

つまらない！

頼子は携帯を脇に投げ出すと、もう一度ごろんと転がって毛布を引っかぶった。

7．チャコールグレーの心模様　1（後書き）

チャコールグレーとは少し暖色の入った灰色な感じで。

8．チャコールグレーの心模様　2

「志郎、これも発注するのか？」

伝票をめくりながら志郎の兄、悟郎が聞いた。

「なんだか、また最近名前の知らない外国の食品増えてないか？」

「ああ、なんだか、流行の酢だと。ダイエット効果があるそうで最近、流行ってるんだそうだ。もともとネットから広がったらしいんだが、問い合わせが増えたんで、一遍入れてみようと思って。女の言うことだから流行り廃りがあるんだろうけど、試してみようと思ったんだ。兄貴がいいなら」

パソコンに向かいながら、志郎が丁寧に説明した。はじめは親の事業を継ぐことに難色を示していた彼だったが、地元に帰ってきて一年、最近は自分の才覚で物や金や人を動かす事が面白くなってきたらしく、意欲的に働いて五歳上の兄を助けている。県一番の私立の進学校から、首都圏の大学に進んだ次男坊。親の金で学生をしていた頃は、勉強やスポーツはできるが、なんちゃって硬派で、苦労知らずの生意気な男だった。なによりも自分が楽しむことが一番の関心ごとだったと悟朗は記憶している。

志郎は首都圏の企業に就職するつもりだったらしく、実家のことは兄に任せ切りでタマに帰ってきても長居せず、両親と祖父に顔を見せると直ぐに都会に戻っていった。それでも一応経済を学んでい

るのだからと、ただの月給取りより、いずれ一つの店を任せるから地元やってみないかと説得したかいがあったと悟郎は思っている。

「な、どうかな？」

「まぁ、こういう新しいモンのことは都会に行ってただけのことあって、俺よりお前の方が詳しいからな。いいさ、何ケースか入れてみよう。……で、何か？　それはオンナ絡みの情報か？」

真面目一方の兄が珍しくニヤニヤ笑いながら、肩をどやしつけた。彼は既に妻を迎えて、一男の父となっている。

「こらバカ兄貴、ミスったじゃないか。……そんなんじゃないよ。ほんとにお客さんから聞いてネットで調べたんだって」

「そうか。それはいいけど、オンナは大事にしろよ。今の彼女。田端んちのコだし」

「……それは兄貴に関係ない。そういう言われ方は嫌だ」

志郎はぶっきらぼうにパソコンに向かって呟いた。やたらにカタカタとキィを打つ。

「悪い。それもそうだな。まぁ……お前がちゃんと考えてやればいいさ。じゃあ、俺は国道店の方へ行ってくる」

悟郎は伝票を置いて、ぶらぶらと搬入口の方へ歩いていった。

「……」

兄が姿を消すやいなや志郎はキィドを打つ手を止め、大きなため息をついた。

なんで、みんな俺の将来を決めように言うのだろう？　頼子も兄貴も。

つまらない。自分はまだなんにも固まってはいないのに。志郎はいらいらと冷えた茶を飲んだ。人口が増えても、この地域の旧弊さは昔と同じだった。志郎はどこに行っても冬木の坊ちゃんだねえ、とか、お家を継ぐなんてえらいね、とか言われるのだ。確かに、仕事は少し面白くなってきたが、四年も都会の空気を吸った身にはどこかしんどい、煩わしい部分もあることも否定できない。

アイツも、そんなことを感じていたんだろうか……？

羽山優菜。

子供の頃は、皆元気で素直に残酷だ。自分に理解できないもので、しかも弱いものならばイジメるという事で排斥しようとした。勿論自分も。

どうしようもなく世間の狭い、卑怯モンのガキだったよな、俺。本当はもっとよく知りたくて知りたくて仕方がなかったくせに。

あの日の夕暮れ――

志郎は目を閉じた。

雨上がり。真っ赤に染まった空と山。冷え冷えとした早春の空気。空を映した畦道の水溜りよりも赤い長靴が、注意深くそれを避けてゆく。遠ざかる小さな背中。そして自転車さえ降りられず、黙って見送った自分。

この間の夕刻、小学校の校門に佇んでいた人影は間違いなく優菜だったのだ。そして、つい昨日再び出会ってしまった。全くの偶然で。

優菜は迷惑そうにしていた。志郎が名乗っても、はじめは思いだせない様子だった。あたりまえだ。ここで過ごした事は優菜にとって、消し去りたい思い出ばかりだったのだろうから。自分だって長いこと思い出すこともなかったはずだ。ただほんの時折、鮮やかな夕焼け空を見る度にあの日の別れが頭をよぎるだけで……

だけど、又出会ってしまった。俺達は。

これはどういうことなんだろうな……今までは遠い思い出だったのに、今じゃ小学校に行けば確実にアイツがいるんだ。直ぐにでも手の届くところに。

志郎は自分が分からなくなっていた。そして分からないままにしておきたくないと感じている。このままでは何かが引っ掛かって、うまく収まりがつかない。彼は酷く落ち着かない心持で指の関節で机を弾いた。

『じゃ』と、身を翻し、逃げるように走っていった優菜。

俺はまたしても見送るしかなかったんだな。

長い髪はそのままだった。そして少し憂いのあるような目元はそのままに美しくなっていた。

なんとかもう一度会って、話をしなければ。昔の仕打ちを謝るにしても謝らないにしても、先ずは自分に目をとめて貰わなければ先には進めない。

だが――。

俺はそれでよくても、アイツはどう思うだろう？

志郎は呆然とディスプレイを見つめ続けていた。

9．チャコールグレーの心模様　3

歩みの遅かった今年の春も、来てしまえばあっという間に盛りとなる。開花が遅れていた桜は早や散り染めの風情で、枝の先端からは柔かい若葉が顔を覗かせていた。

「はぁ疲れた……」

ようやくその日最後の家を訪問し終えた優菜は、力無く自転車をこいだ。新学期恒例の家庭訪問週間である。二組の児童は三四人で四日間かけて全ての家を回るのだが、自転車しか持たない優菜には、それはそれは大変な仕事だった。地区の地図帳を広げてみても、一面畑や川だけのページがあったり、そうかと思えば同じような戸建てが続いていたりする多様さだ。その上、旧街道などは細い上に曲がりくねっていて、土地勘のない者だったら辿っている内に方向さえ見失ってしまう。いくら子どもの頃に数年住んでいたと言っても、余り出歩いたことのなかった優菜にとっては初めての場所と変わりがない。幾度か迷ってようやく国道まで出て来れたが、何と広い校区なのだろう、と優菜は感心した。家庭訪問期間中は午前中授業なのだが、時計を見ると既に勤務時間を過ぎてしまっている。

学校と家の往復だけだった子どもの頃は気がつかなかったけど……こんなにいろんな場所があったんんだ。それにしてもこの二日間で日に焼けてしまったわ。明日は帽子を持って出よう。

今日は主として元からの地の家を訪ねて回ったのだが、一軒一軒の距離がかなりあり、何度も地図で確かめなくてはならなかった。最後の訪問家庭は、校区の一番端だったので、学校には戻らず直帰すると届けていたが、それで助かった。学校からはかなり離れた場所だったのだ。この道を毎日歩いて通学していたら六年間でかなり体力がつくだろう。だが、優菜は既にへとへとだ。空腹でもあった。地図で確かめると、このまま国道を北に進んで右に折れたら商店街の南端に出れそうだ。そこを抜けたら駅は直ぐである。

それにしても――

今まで家庭訪問の経験は無いではなかったが、この校区は今まで務めたどこの校区とは違っていた。簡単に言えば、地の家と新興住宅地でその印象がかなり違っているのだ。

新任教師である優菜は、これが初めてクラスの児童の保護者と会う機会だった。新任という事で不安がる保護者もいるかもしれないと思い、充分下調べをして、話題を用意して臨んだのだが、実際に保護者に会ってみると殆どそれらは役に立たなかった。地元の家では否応なく座敷に上げられ、過分な茶菓の接待を受けたり、祖父母まで出てきて若い先生だねぇと感心されたが、新興住宅の家では玄関先で母親と話をする事がほとんどだった。話題も学習や進学に関する事が多く、クラスでの役割等を離しても余りのって来ない場合もあった。

どちらがいいとか、悪いとか言えないんだろうけど……

とにかくひたすら疲れた。余程気を張っていたのだろう。しかもこれで終わりではない。明日も明後日も続くのだ。とにかく早く帰

ろうと、優菜はひたすらペダルを漕いだ。二キロほど進むとようやく市場の明かりが見えてくる。

商店街は夕飯の買い物客はそろそろ少なくなってきていたが、それでも途切れることなく人が行き交っている。流石に自転車では通り抜けられないので、優菜は下りて歩くことにした。田舎の町にしてはかなり大きな商店街で、定食屋や碁会所などもあり、地元の良きコミュニティとなっているようだ。優菜のクラスにはいないが、ここの商店主の家の子も学年に数人はいる筈だ。

誰に見られているかもしれないから、ここではまだ先生の顔をしていなくっちゃ。

優菜は自転車を押しながらそんな事を考えていた。物珍しく店を眺めながら北へと進んでゆき、商店街の出口近くで目に入ったものは――。

「なにこれ」

優菜は思わず声に出して呟いていた。

リカーショップトオキ。

アーケードの出口にある大きな酒屋。明るい店内からはみ出すようにおかれた商品の数々。内から外から客の出入りが多い。店と言っても最早小さなビルと言ってもいい規模で、アーケードの端からは三階建て以上の建物がはみ出ている。小売業の商店の間でひときわ目立つ、大きなカタカナの看板の下の方には小さく漢字で冬木酒

店と書いてあった。

トオキ……トオキって、冬木！？

これはもしかしたら、少し前にこの先のロータリーで出会った、あのトオキシロウという同級生だった男の名字ではないか？　そう言えば家は酒屋だと聞いたような気もする。優菜は思わず明るい看板を見つめていた。彼女の記憶の中では、駅前に商店街があった事は覚えているが、こんな大きな酒屋は存在していなかった。そう言えば店もまだ新しいようだ。

酒屋と言っても、酒類は中の方にあるらしく、店先には特売品と思われる、菓子類や普通の飲料のケースが大量に置かれている。レジも一つだけではないようだった。

こんな大きなお店の息子だったんだ……

どう言う訳か、優菜はトウキシロウがこの店の身内であると確信していた。店は繁盛しているらしく、まとめ買いをした主婦達が大荷物で出てくるのを店員が愛想よく送り出している。それらをぼんやり見ていると、奥の方から見間違いようのない大柄な男が、段ボールを抱えて出てくるのが見えた。

店先に置いた商品を補充しようと、志郎は倉庫から荷物を運び出した。店は一番忙しい時間帯を過ぎたからこれでやっと一息つけるだろう。後はバイトで何とかなる筈だから、志郎は事務所に戻って

明日の配達の確認や工場への発注の作業に戻れる。レジには二人の客が並んでいるので、反対側の棚の影から店先に出ると、彼女がいた。

目が合う。

羽山優菜は驚いていた。自転車を手で持って立っている。見覚えのあるショルダーバッグが前カゴからはみ出していた。相変わらず地味な服装で、長い髪を後ろでまとめている。志郎は一瞬でそれら全てを見取った。

「お……」

掛けようとした言葉は、露骨な嫌悪の表情に押し留められてしまった。目が合った途端、優菜は激しく顔を顰め、さっと自転車に乗って駅の方へ走り去ってしまったのだ。両手に荷物を抱えたままの店先では、どうもしようがない。志郎は急に重くなった段ボールを床に下ろした。

そうか、そう言う事か……。

ジャンパーからカッターナイフを取り出すとのろのろと箱を開ける。

つまり俺の事なんか、目に入れるのすら嫌ってことだよな？

志郎を見て驚いていたと言う事は、優菜がここが彼の店だとは知らなかったのだと知れる。彼女がこの街にいた頃にこの店はまだ出来ていなかったから、知らないのも無理はない。小学校から駅までの最短距離の道筋の中に商店街は入らないので、普段はアーケード

の下を通る事は無いのだろう。今日は何かの用事でたまたまここを通り掛り、偶然この店を、そして志郎を見てしまったと言うところだろう。

余程俺を嫌っているんだ。無理もないか……。

商品を陳列棚に並べながら志郎は思った。子どもの頃のいじめというものは、それをした方は忘れていても、された方の傷はなかなか言えないと言われるが、正にその通りだったと言う訳だ。目があった瞬間の強張った頬と、歪んだ唇。それは紛れもない厭(いや)の感情の噴出で、それがまっすぐ志郎の胸に突き刺さったのだ。

ばさばさばさ

手から取り落とした商品が床に散らばる。バイト達が驚いたように目を向けた。

くそっ！　何でこんなに堪(こた)えているんだ、俺は。

商品を拾い上げながら、心が鉛を飲みこんだように重くなっていくのを志郎は意識していた。

だが、それでも――。

このままにしていてはいけないのだった。

志郎にとっても、優菜にとっても。

１０．チャコールグレーの心模様　４

春はどんどん過ぎ去る。

めきめきと木々は萌え立ち、昼間は半袖でないと暑いくらいの季節になった。

あわただしく始まった新学期も少しずつ落ち着いてきている。

水曜日は週の半ばということで、優菜は比較的楽な時間割を組んでいる。一時間目は国語、二・三時間目は生活総合科、四時間目は体育、そして給食があって五時間目は学級活動、主に生活総合科で、学習したことを話し合ったりまとめたりする。生活総合科、略して生活科は葛ノ葉小学校の場合、学級、もしくは学年単位でいろいろな活動をする事になっている。授業内容は学年会議で検討され、校外に出る事もある。

その日の生活科の学習内容は、「自分たちの住む地域の産業を知ろう、体験しよう」というテーマだった。五年生ではこのテーマで、一カ月計画の単元学習を立ち上げていて、最後の仕上げに実際に職業体験をする予定になっている。これは葛ノ葉小の五年生でここ数年春に実施している活動である。

今日はその単元の一時間目。

自分たちの町にはどんな産業があるのかを調べて、どんな風に自分に関わっているかを出し合うのがテーマだ。

他郡市から通っている者も多い教師達に比べて、地元民たる児童たちは地域の事情に個々に詳しいはずだ。だが改めて授業で質問されると分からなくなるのが子どもなのである。産業と言われても、最初は何を答えたらいいのか戸惑う様子だったが「じゃあ、お父さんやお母さんのお仕事を言いあってみたら？」という優菜の問いをきっかけに、ぽつぽつと手が上がり始めた。その殆どは産業というより職業だったが、次第に分かり始めた子ども達から、その仕事が自分の生活のどんな所に役立っているか活発に意見が出てきだす。

「僕の父さんは隣の町の農協に勤めてるよ」

「じゃあ、俺の親父とどっかで会ってるかもな、ウチ農家だもんね」

「あたしのママはスーパーのバックヤードってところ。パートだけど」

「バックヤードって何？」

「裏方さん」

「せんせぇ、パートも産業に入るんかなぁ」

「う〜〜ん、産業の元を支える存在かなぁ。でも大事な仕事だよね」

質問したのはクラスの人気者、横山健太だ。そんな質問は予想していなかった優菜は焦りながらも取りあえず無難に返事をした。全

く意表をついてくれる。これだから、授業は気が抜けない。だが、子どもとのやり取りは楽しかった。

これまで優菜はこの科目の展開が苦手だったが、児童たちに主導権を与えた今回の授業はなかなかいい感じにまとまってきていると優菜は感じた。

キュキュキュ、とチョークが鳴り、書記役の進藤と言う女子がなかなか上手な文字で黒板を埋めてゆく。三分の二ぐらい埋まったところで、優菜はそろそろまとめようと立ち上がった。

「ずいぶん意見がでたね。進藤さん、ご苦労さま。席に戻っていいですよ」

仕事とその役割を並列して書かれた板書をざっと見渡してみると

農家、お米作りなど・・・・・・毎日の食事のざいりょうになる
養鶏・・・・・・卵をつくっている
農協・・・・・・農家の仕事を後押しする、ちょ金も出来る
スーパー、いろいろな者を売っている・・・・・・毎日の買い物
車のエンジニヤ・・・・・・車を安全に走らせたり修理をする
家やビルを設計者・・・・・・自分たちの住む家や学校などを建てる
会社でお金の計算をしている・・・・・・その会社の家族が生活するお金を分ける
公務員・・・・・・街の管理をして住みやすくする
いろいろな物の配達をしている・・・・・・宅配便など

大きく分けて生産的なものとサービス業的なものに分かれる傾向があった。概ね、地元の子どもの意見は前者、新興住宅地の子ども

は後者に分かれるのも興味深い。

「……じゃあ、次は一度体験してみたい産業って何かな？　議長の田村君、順番に聞いてみてくれる？　進藤さん今度はノートに記録してね。今まで出た以外のものでもいいからね」

これも比較的すんなり手が上がり、記録をとったところで授業が終った。これを元に児童が体験できそうな職種をピックアップし、職員で授業に協力してもらえそうな所に依頼する。少し大変そうだが、去年もおととしも同じ学習をやっているので、ある程度は地域の人たちにも協力してもらえるし、既に地元の農家や商店からも協力の申し出もある。しかし、新しく希望の出た職種で児童が出来そうなものには、校長名で依頼状を出さなければならない。体験学習とは下準備がなかなか面倒なのだ。

でも、結構盛り上がってきたわ。新学期で浮足立っていた子ども達が共通の目標をもってきた感じがする。

優菜は、体験学習が少し楽しみになってきた。児童が興味を持ち始めた事が、授業の手ごたえから伝わってきたからだ。

余り突拍子もない職種は無いし、明日の学年会議で早速報告しなくっちゃ。

優菜は四時間目の体育に備えていそいそと教室を出た。更衣室でジャージに着替え、運動場に出ると既に体育係りがヤカンに水を入れ、ドッヂボールのコートの線を引いている。今日は男女混合で行うと言ってあったので、みんな早くやりたいと協力的に整列していた。黄色っぽいグラウンドに半袖の体操服が眩しい。

準備体操とランニングを終え、いよいよゲームの開始である。

ピーッ！　優菜の笛の合図で2チームに分かれ、ゲームが始まった。

ドッヂボールは子ども達が好きで、週に一度はねだられて行っている。一学期の終わりにはクラスマッチもあり、ほとんどの子どもが生き生きと取り組む活動だ。

大きな体格の子はきついボールを放るが的にもなりやすく、何回もコートを出たり入ったりしている。すばやく逃げ回る小さな女子もいる。みんなすぐに汗みずくになり、大声を上げていた。小学生だった頃、当てようと狙われもせず、ボールを積極的に拾いに言ったこともない優菜は始めのうちそれが不思議だった。

「おい！　ワンバン（ワンバウンド）は関係ないだろ？　陣地に残れ！」

「ええっ、ほんまにワンバンか？」

夢中な声が運動場を飛び交う。コートのことを陣地と言う習慣は昔からのものだった。

ドッジボールは制限時間内にどれだけ自分たちのコートに味方が残っているかで勝敗をきそう。勿論味方が全部当てられてコートの外に出たら、そこでゲームセットだ。AチームとBチームで2試合したが、両方ともBチームの勝ちになった。2回ともAチームの子が全員当てられてしまったのだ。

「せんせぇ～、不公平よ～」

Aチームのリーダーの大澤さんが不満そうに言いだした。

「なんで？」

「だって、ウチ一人休んでいるし、向こうはウマい横山君がいるんだよ？」

「そうそう！　もう一人入れてよ～。」

大体こういう発言をするのは女子が多い。徒党を組むと途端に強気になる。

「何だよ～、この前の学級会で公平にチームを決めたじゃん」

Bチームの男子が負けじと応じる。

「だって、一人休むとは思わないもん。それも結構うまい杉ちゃんだしぃ。誰かこっちのチームに来てよ。もう一試合できる時間じゃん」

「そうだけど……誰かチーム移るやつおる？」

体育委員の横山健太が自分のチームに問いかける。だが、ええ～、とBチームのメンバーからは不満の声が上がった。圧倒的に勝っているチームから移動するのは誰だっていやだろう。だが、このままではAチームの子たちも納得しそうに無い。優菜はちょっと困ってしまった。

「……じゃあ、先生こっち来てよ！」

Aチームの女子、安藤が声を上げた。

「ええ？」

「そうだ！　それならいいよ！」

「せんせぇ入って！」

今まで不満を漏らしていたAチームの女子が優菜の腕を掴んで群がる。

「ええ～、でも先生あんまり上手じゃないよ？」

「いいっていいって！　数のうちだから！」

あまり嬉しくないお言葉と共に優菜はAチームのコートに引っ張っていかれた。Bチームの子ども達も面白そうな成り行きに笑いさざめきながら、早く試合を始めたくて自分たちのコートに入った。審判は無しでもいい雰囲気になる。

しょうがないなあ・・・

しかたなく優菜はAチームに加担してゲームに参加することにした。勿論今までにもドッヂボールをやった経験はあるが、この学校では初めてだ。みんな都会の学校の子ども達より運動ができる。投げるボールは結構威力があって侮れない。

そして試合が始まった。

Ｂチームはさすがに強い。横山は的確に狙った的に鋭い当ててくる。外しても勢いのあるボールは向かい側の味方に拾われて速攻で投げ返され、なかなかいいコンビネーションで攻めてくる為、Ａチームのメンバーはどんどん減っていった。

優菜は小五にしては大柄な横山とほとんど同じ背丈しかないが、それでも女子の中では大きくて目立ち、よく狙われた。しかし、学生時代少しやっていたバドミントンのおかげでフットワークがすばやく、逃げることは上手だった。

「せんせ～、ずりぃ～、逃げてばっかじゃんか～」

三度目にかわされた横山が笑いながら文句を言う。

「いーや、逃げるのも作戦よ？　ねえ？」

すっかり楽しくなってきた優菜は数少ないメンバーに訴えた。そうだそうだとこちらも負けじと声が上がった。

「さぁみんなあと少し。斉藤君、ボール取ってね！　反撃しよう」

いつの間にか優菜もびっしょりと汗をかいていた。

運動場の向こうの道に白い軽トラックが停まっている。立ち木に遮られて運動場からはよく見えないところだ。

志郎は車を降りて、木陰からネット越しに歓声の上がっている方を眺めた。

体育の授業なのだろう。子ども達が大声を上げて走り回っている。その中で優菜が生き生きと動き回っていた。白いTシャツに紺のジャージ。後ろで一つにまとめた髪がぴょんぴょん跳ねまわり、小柄なその姿は、子供たちの中に紛れ、彼女が先生だと知らなければ指導者だと思えない。

なんだ……あいつ、逃げてばっかりじゃないか。ヘタクソだなぁ……。

優菜のこんな姿を見るのは意外だった。

勿論同級生だったころにも体育でドッヂボールはやったはずだし、志郎はいつもリーダーだった。チーム分けも率先して行った。しかし、思い返してみても、そこに優菜の印象はない。

きっとうまく立ち回っていつも逃げてばっかりだったんだろうさ。

しかし、今の優菜は同じように逃げてばかりでもちゃんと相手のほうを見てボールの行方を追っている。うまくボールを受けた子に指示を出してまるでそのチームのリーダー役のようだった。勿論指導者なのだから当然なのだが、積極的にゲームを楽しんでいる印象を受けた。

「ワァッ！」「ヤッターッ！」「パス！パァ～ス！」

ひときわ大きな歓声が上がった。優菜が終に大柄な男子の放ったボールを受けたのだ。頬が真っ赤に紅潮している。すぐに優菜は自分のチームの投げ手の男子にボールをパスした。腕がぐんと振られ、汗が飛び散ったのか空気が煌いている。

パスを受けた男子はすばやくボールを放って、終にクラスで一番大柄でリーダーだと思われる男子の足先にボールを当てる事ができた。

「ウワァー！」「横山が当たったー！」「センセー、ナイスアシスト！」

子ども達が口々に叫び、優菜も両手をあげて近くの子どもと対ハイタッチをしている。これで残ったメンバーは両チーム同数となり、一気に盛り上がったところでチャイムが鳴った。

時間から見て次は給食の時間だろう。残念そうに後片付けをするのは何も子ども達だけではなかった。

残念だったな……羽山……最後のボールはナイスだったけどな。

志郎はこっそり呟き、配達の途中だったトラックに乗り込む。エンジンをかけて、フェンスごしに最後に運動場に目をやると、子ども達に囲まれた優菜が校舎に入っていくところだった。

二日後――――

沈痛な面持ちで午後の駅前通りを歩く優菜がいた。

学年会議の結果、新しく候補に挙がった体験学習の商店主に依頼をしに行く役目を仰せつかってしまったのだ。

優菜は溜息をついて手にしたプリントを見つめた。幾つかの商店の名の一番下。そこには「リカーショップ冬木」と示してあった。

11．チャコールグレーの心模様　5

さてと……いよいよここだわ。

優菜は駅前のロータリーの端に立ち、少し先にある商店街を覗きこんで呟いた。商店街の一番忙しい夕食時を避けて来たので、既に春の日はとっぷり暮れている。

体験学習の最後の依頼商店、「リカーショップ冬木」。

この間、家庭訪問の帰りに偶然ここを通りかかった優菜は、店先に出てきた志郎とばったり出くわしてしまったのだ。その時は動揺の余り、逃げるように立ち去ってしまった。あの時のことを思い出すと余りに大人気なくて恥ずかしい。校区内にある駅前商店街の事とて、これからだって通りかかるかも知れないのだ。いくら苦手な人物だからと言って、逃げ出すのは社会人として無礼だろう。せめて会釈くらいはすべきだったと反省している。

まぁ、でもあの時偶々（たまたま）いたからと言って、彼が又店にいるとは限らないし、たとえいたとしても私は地域の小学校の代表としてビジネスライクに応対すればいいんだから……

優菜は訳もなく胸を張った。だがしかし、そうは思いつつ、少し離れた場所から店先を窺う自分に嫌気がさす。これではまるで不審者ではないか。

何も恐がることはないと自分に言い聞かせ――――その実、言い聞

かせなくてはならないと言う事は、実は二の足を踏んでいることの証ではないかと言う、自分への突っ込みにはきっちり蓋をし、意を決して顔を上げると優菜はつかつかと店に入っていった。

「ごめん下さい。私、葛ノ葉小学校から参りました」

レジの店員に名のり用件を話すと、奥にいる社長に言ってくれということだった。それは予定していたことだったので、奥にある小さなドアに掲げてある「関係者以外立ち入り禁止」のプレートのあるドアを開けて入っていった。おそらく事務所なのだろう。「社長」というのが志郎の兄である事はすでに調べていたから、優菜は我知らず肩の力が抜ける。

よかった、あの人は留守なのだわ。

ドアの奥は矢張り小さな事務室で、八畳ほどの空間だった。壁の一面は全てアングル棚で、沢山のファイルやカタログがぎっしりと並んでいる所は、学校の職員室と変わりがない。壁際に置かれた三台の大きな事務机にはそれぞれ最新型のパソコンが置いてあり、様々な伝票やメモがコルクのボードに貼り付けられている。

奥の方にさらにドアがあり、そちらはおそらくは倉庫に繋がっているのであろうと思われた。そこは薄く開けたままになっている。

優菜が入って云っても事務室には初め誰もいなかったが、奥のドアの外で携帯の鳴る音が聞こえた。優菜がぎくりと身構えると、間もなく奥の扉が開き、二人の男性が入ってきた。中背の青年と、少し頭の薄い壮年の男性が。

「あ、いらっしゃい。えーと小学校の先生で？」

「はい。羽山と申します」

優菜はほっとした。話しかけたのは落ち着いた感じのする若い方の男性で、顔が似ていることから、この人物が聞いていた社長で、志郎の兄と思われた。もう一人年配の男性は単なる社員か関係者で、ちょっとこの部屋に用があっただけらしく、青年に一言二言言った後、優菜に会釈をすると店の方へ出て行ってしまった。

誰だっていい。相手が志郎でないのなら、こちらも構えずに話ができると言うものだ、と優菜は目に見えてリラックスしている自分を感じる。

「お忙しいところ申し訳ないのですが、先日お話した生活体験学習の件でお願いに上がりました」

「はいはい、話は伺っていますよ。私はこの店のオーナーで冬木悟郎といいます。はい、名刺……あ、失礼、ちょっと待って」

突然鳴り出した無遠慮な携帯の音にどきりとするが、商売の時間中に邪魔をしているのは自分なのだから、仕方がないと優菜は大人しく待った。

「なんだ、お前か……え？ああ、うん……いるよ？　それがどうした？……え！？　十分待てって！？　何だよそれは？　俺が言うのか？　……ああ、ああ、分かった。まぁいい、とにかく早く戻れ」

携帯をポケットにねじ込むと、悟郎は優菜に済みませんねと頭を下げた。その笑顔はいい印象を優菜に与えたが、電話の内容に優菜は不安になる。電話を受けながら優菜をちらり見たことも気になっ

た。ここはさっさと切り上げた方がよさそうだ。

「ええ、商店街の会長から話はきいています。小学校の生徒さんを半日受け入れたらいいんですよね？　確か一昨年あたりから、この商店街で行っているとか」

「はい。体験学習です。組合長さんにはさっきお会いしてきました。今年もできるだけ協力してくださるとのお言葉を頂いて……」

「ええ、ウチも是非協力させていただきます。なんたって私も、弟も葛ノ葉小学校の出身ですからね」

悟朗は鷹揚に笑った。感じのいい頬笑みだ。同じ兄弟でもこんなに印象が違うのだと、妙なところで優菜は感心した。

「あ、ありがとうございます。授業の実施日は五月の二八日で、こちらには四人の児童が伺う予定です」

「男の子ですか？」

「男女二人ずつです」

「ウチは酒屋だから、商品は重いものもあるけれど、力仕事なんかもさせていいんですか？」

「はい大丈夫です。ただ、万一の事があってはいけないから、割れ物や高価な商品には触れさせないようにしてください」

「成程、なかなか気を使いますね」

「申し訳ありません」

「いや、僕の事ではなく、先生の事を言ったんですよ。子供たちの管理と言うのは大変そうだ」

悟朗は理解ある微笑みを優菜に向けた。それはとても感じのいい笑顔だった。似たような顔の男を知っているが、その人物が笑ったのは見た事がない。

……何をどうでもいい事考えてるの、私。さっさとお話を済ませて引き上げないと

優菜は自分の思いを打ちきって頭を仕事用に切り替える。

「管理と言うか……対応ですけれど。もし児童たちの態度で目に余るような事があったら、少々叱って頂いても構いません。保護者にもそのようにお話させて頂いているので」

「ははは、そうですか？　子どもを叱るのは見慣れているんですが……僕の弟も相当な悪ガキだったんですけどね、よく親に叱られてまして……」

ええ、そうでしょうとも！

優菜は内心、大きく頷いたが、余り悠長に話していたくはなかった。だが、どう言う訳か忙しいはずの悟朗は世間話になだれ込みそうな気配である。さっきの電話で十分待てとか言っていたのが、気になったので、優菜は急ぐ振りをしてバッグからプリントを取りだした。

「お時間頂きましてありがとうございます。詳しい資料はもう少し日が接近したら、持って上がりますので……これは学校の授業計画です……何卒よろしくお願いいたします」

一気にまくし立て、深くお辞儀をすると優菜はそそくさとその場を後にしようとした。

その途端、表のドアが勢いよく開く。さっきの電話からまだ5分も経っていないはずだが、目の前には優菜が最も会いたくない人物が立っていた。

「よぅ……」

志郎はドアを塞ぐように突っ立って優菜を見据えると短く声を掛けた。

「あ、こ……こんにちわ。あの……それでは社長さん、よろしくお願いします。私はこれで……」

優菜は志郎を見ずにぺこりと頭を下げた。それから振り返り、不思議そうにこちらを見ている悟郎にもう一度深々とお辞儀をすると、志郎の横をすり抜けようとした。

が、志郎はドアの前を退こうとしなかった。体の大きな彼がドアの前に立ち塞がっていると外に出られない。優菜はどうしても顔を上げられなくて、目の前のブルーのシャツを見つめた。

「なんだよ。もう帰っちまうのか？　なにか学校に協力しろって話

じゃあなかったのかい？　羽山さん」

「あ……その件は社長さんにお話をして許可を頂きまして、今お礼を申し上げていたところです。なので私はこれで失れ……」

「待てよ」

立ちふさがる志郎の後ろに回ろうとした二の腕ががっちりと掴まれる。この前と同じように。優菜はぎょっとして身を竦めた。

「……なんでしょうか？」

反射的に腕を振り解いて優菜は志郎を見上げて問う。近くに立たれるとふり仰がなくてはならないほどの身長差が恨めしかった。

「もう五時過ぎたぜ……勤務時間は済んだろう？　少し話さないか。……羽山さん」

「なんだ、お前、この先生と知り合いか？　さっきも何やら言ってたようだけど……」

悟郎が二人の間に流れる微妙な空気を気にしながら弟に尋ねた。

「ああ、そうだ。俺たちは同級生さ。羽山さんは昔ここに住んでたんだ。一緒のクラスだったよなぁ」

片眉を上げてこちらを見る志郎に、優菜はとりあえず曖昧な笑いを浮かべて頷くしかない。悟朗は驚いたようだが、すぐに納得したようだった。

「へぇえ、そうなんですか」

「ええまぁ……でも私、学校に戻らなくてはいけないので……失礼します」

きっぱりとそう伝える。無論嘘だが上出来だ。これでもうしつこく絡まれることもないだろう。しかし、志郎は気軽に頷いた。

「ああ、そうか。じゃあ送ってやるよ。軽トラだけどな。悪い兄貴、ちょっと行ってくるわ」

「ああ、大丈夫だ。しっかりセンセイをお送りして来い」

壁のキーボックスから車のカギを取り外した志郎に、悟朗は上機嫌で頷いた。

１２．茜色の道の上

なんでこんなことになっているんだろう？

軽トラックのベンチシートに志郎と並んで座りながら、優菜の周りには疑問符が飛び交っていた。

ちらりと横で運転する志郎を見ても、夕暮れの国道をまっすぐ見つめ運転している精悍な横顔が見えるばかりである。

さっきは話さないか、といったはずなのに一言も口をきかない。優菜も特に話題はない。当たり前だ。十年も前にほんの数年一緒のクラスで、しかも仲が良かった――どころか、苛められて大きらいだった同級生に今更なんの話があろう？　はっきり言って迷惑である。

「正門前でいいのか？」

優菜が考え込んでいる間に短いドライブは終わり、トラックは小学校へと続く道を走っていた。

「あ、いえ、ここで……」

志郎は軽く頷き、正門の少し手前で車を停めた。正門前などとんでもない、万が一同僚に見とがめられて勘ぐられては非常に不本意

だ。この間話す事も無く、黙りこくっていただけの薄いつながりなのだから。優菜はもごもごと礼を言うとあたふたとトラックを飛び降りた。

そのまま正門から校内に駆け込む。かなり日が長くなった今日この頃だが、流石に六時前だと昼とは言えない。職員室に戻ると、残っている職員は既に半分くらいになっていた。本当はあのまま駅から直接帰る予定で、そのように段取りをしていたから既に残った仕事もなく、手持無沙汰でなんとも情けない気分になる。学年主任の永嶋や藤木の姿も無い。彼等も矢張り別の地区で体験学習依頼で頭を下げて回っているのだ。この分ではおそらく直帰するのだろう。話し相手もいない。しかたなく、優菜は十分ほど無理やりファイルの整理をして過ごした。

せっかくあのまま帰れたのに、学校に戻るとウソついて。しかもトオキシロウを振りきれずに車で送ってもらって……私一体何やってるんだろう？　もういいよね。あの人だって仕事があるんだからとっくに帰っただろうし。いいや……帰ろう。

「あら羽山先生、今日は五年は体現学習の依頼だって言ってなかった？　わざわざ帰って来たの」

「あ……ちょっと……」

声を掛けてくる同僚に忘れ物をしてきた振りをしてごまかすと、優菜は再び校舎を出た。校門を出た所でくるくるとあたりを見渡しても白い軽トラックの影はない。

あたりまえか。

優菜はジャケットの裾を引っ張った。陽気は暖かく、直ぐに上着も要らなるだろう。門からまっすぐ伸びる道を足早に歩き始める。今日は商店街を回る予定だったから自転車に乗って来なかったのだ。だが、駅までは早足で十分の距離だ。同じ道を引き返すのはバカバカしいが仕方が無い。溜息をついて優菜が歩き始めた時――。

「よう、もう終わりか？」

「きゃあ！」

近くの家の玄関からぬっと大きな影が出てきて優菜は肝を潰した。

「きゃあって……俺はお化けか……けど、わるい。驚かせちまったようだな。いや、何。ここん家はお客さんの家でさ、ここまで来たついでに御用聞きをしてたんだ。今終った」

見れば広いその家の駐車場に軽トラックが止まっている。優菜は泣きたくなった。一体何の為に小芝居まで打ったのだろう。情けなくてどっと疲労が押し寄せてきた。

「送るよ」

「いりません」

「……じゃあ、言い方を変える。送らせてくれ」

「……なぜでしょう？」

優菜はすっかり落ち込んでいる自分を悟られまいと、必死になって足を踏ん張り、きっと志郎を睨みつけた。

「なぜって、何が？」

「私のことなんて放っておけばいいじゃないですか！　どうして構うんですか？」

「……っ」

大きな瞳に溢れんばかりの感情が滾（たぎ）っている。志郎は唇を引き結んでそれを真正面から受けた。受け止めなくてはならないのだ。

「あなたと私は、別に友達でもなんでもないでしょう？」

「……確かに」

優菜の言葉は真実だ。彼女にとって自分は友達なんかじゃない。

「……けど、なれねぇかな？」

「なりたくないです」

「……キツいな」

一刹那考えることすらせず、言い放たれた言葉に志郎は足元に視線を落とした。横顔を玄関灯が照らしている。

「無理ですから」

「俺を嫌うのももっともな話だけどな。だけどもう少しだけ話がしたいんだ。……乗れよ」

嫌だと言おうとしたその時、門扉近くでの会話が聞こえたのか、ガラリと脇戸を開けてこの家の主婦がけげんそうに顔を出した。

「なんですかぁ？」

「いえっ……すみませんでした」

揉めていると思われてはならない。自分は直ぐ傍の小学校の教師なのだから。優菜は作り笑顔で会釈し、門から足早に立ち去る。志郎もすぐに営業用の表情を作った。

「あ、すみません。ここでばったり友達に会っちゃって、つい話しこんじゃって。ご注文ありがとうございました。これで失礼しますんで……なっ？」

そう言うと、志郎は前を行く優菜の腕を強引に取って軽トラックに放り込んだ。そのまま自分も乗り込み、エンジンをかけると、あっという間に一本道に乗り入れる。そのままトラックは妙にゆっくりとした速度で駅へと走り出した。

「なっ！　何するんですか！？」

「……この道はそんなに変わんねえだろ？　舗装されただけで」

優菜の抗議に応えず志郎は前を見ている。少し先の駅とその周囲の街のずっと向う、真正面に見える山々の稜線は暮れはじめた空を背景に濃い青に見える。それを見ながら志郎は呟いた。

「この道覚えているか？」

「さぁ？」

優菜の返事は残酷なほど短い。尋ねた者の気持ちを打ち砕くように。だが――

どう言う訳か、優菜はこの道をよく覚えていた。小学校の正門から西に向かってまっすぐ伸びるこの道を。あの頃はまだ地道で、雨が降る度轍（わだち）に大きな水溜りが出来たものだった

「そうか。昔はもっと広かったんだが……今は田んぼがどんどん住宅地になってな……」

そう。優菜も覚えている。学校が終わると子ども達は皆、正門からこの道に飛び出し、笑いさざめきながら友だちと並んで帰るのだ。自分にはそんな思い出はない。いつも一人で家路を辿った道だった。面白くも無い。あの頃の苦々しい思い出は全てこの男に繋がっている。

「いつからこんなに家が増えたんだろう。毎日見てるとわからなくなるな？」

「……」

優菜は頑固に前だけを見ていた。もう直きのんびりとした春の陽も落ちて、宵闇が辺りを包むだろう。

「うん、この辺りだったか？」

のろのろと進んでいたトラックが停まり、すばやく運転席から飛

び降りた志郎が、そのままぐるりと回って助手席のドアを開けた。

「降りて」

「え？」

ドアを開けて覗きこむ志郎に驚いて優菜は身を引いた。だが、腕を取られるとするりと引っ張り下ろされてしまう。

「済まん。でも降りて見てみ？」

訳が分からないまま、優菜は辺りを見渡した。

その辺りは並んでいた住宅が切れて広々とした空間が広がる一帯だった。道の両側は一面の田んぼ。もうすぐ田植えが行われる筈だが、今はまだ田起こしの時期なのだろう。水が張られた田んぼに、暮れてゆく空が映っている。

「ここは……？」

「俺達が別れた場所だ」

「……え？」

思いもかけない言葉に優菜は、はっと志郎を見た。がっちりと目が合う。

「そうだここだ。用水路の名残があるからな。ここで昔、俺たちは別れた。だからここからやり直すしかないんだ」

「……」

言葉も無く優菜は志郎を見つめる。落ちかかる夕陽を受けて志郎の顔の影が濃い。

「昔、俺のやった事、許される事じゃないって分かってる。許して欲しいって言う資格もねぇ。現にお前は逆毛を立てた猫みたいに俺を警戒してるしな」

「……」

妙な例え方をされたが、なかなか当たっていると優菜は思った。この男の言う事など何も聞きたくは無かったし、何を聞いても信用できない。

「だから今は謝らない。例え謝ったって自分の気をすますだけで、お前は受け入れてくれるとは思えねぇし……」

「お前……？」

さっきから何度もそう呼ばれている。耳障りだ。あんたなんかにお前呼ばわりされたくないと言う意味を込めて、優菜は短く言い返した。

「悪い……羽山さん」

志郎は素直に言いなおした。

「あの頃はみんなどうしようもなくガキで、その中でも俺は特に鼻持ちならない嫌なガキだった。お……羽山さんの事苛めてた」

「……」

「俺は忘れてない。ずっと自分の中に重い物を抱え込んでた。あれから色んな事があったけど……どこにいても夕焼け空を見る度、妙に鮮やかに思い出すんだ。ここで最後にあった日の事、何度も繰り返して」

「最後……？」

志郎とこの地で最後にあった日……それは――

「ああ、そうだ。おま……羽山さんが転校する前の日だった。俺はこの道の上で完膚（かんぷ）なきまでにやり込められたっけ」

「ええっ！」

優菜は思わず声を上げた。

「そんなことしてない！　冬木君がサボリとか言ってくるから……もう私は関係ないんだって……そう言っただけよ！　皆して無視していたくせに、学校を休んだぐらいで……」

優菜はしまったと言う顔をした。つい喋り過ぎてしまったのだ。これではまるで乗せられてしまったも同然ではないか。

「覚えていたんだな……」

「！」

志郎も驚いていた。そんな小さな言葉まで優菜が覚えているとは思わなかったのだ。

「やっと俺の名前を呼んだな」

唇の端を少し上げて志郎は笑った。

「……」

悔しくて眼を逸らす。覚えていたのが悔しくて。ずっと忘れてはいなかった。長い間記憶の底にしまってあった、あの日。雨上がりのすばらしい夕焼け空、まっすぐ伸びる泥んこの一本道、自転車の少年と交わした言葉を。

「あの時、お前は俺の前をするりとすり抜けて、そのまま学校に戻ってこなかった。俺は本当は……」

言いよどむ志郎の眉根が一瞬深い皺を刻み、平らになった。

「だから……すごい時間が経っちまったけど、あん時言いそびれた言葉を今言いたいんだ」

「言葉？」

「学校に来いよ。そう言いたかった」

「学校に？」

「戻って来て欲しかった。そう思ってたのに言えなかった事を長い事抱え込んでたんだ。馬鹿だろ？」

「……」

「だけど、お前……羽山は帰ってきてくれた。奇しくも学校に戻って来たんだ」

「ここに来たのは辞令が下りたからです。自分の意思ではないわ」

「うん、そうだろうな。分かってる。けど、俺は……だから……」

取り付く島の無い冷たい態度は相手の気持ちを挫いてしまうようだ。だが志郎は引くつもりは無かった。

「……うん、うまく言えねぇんだけど。許してくれなくってもいいんだ、許されない事をしたんだし、自分の気を済ます為にこんな事やってるわけじゃない……でも、こんな事、お前が言うのかって羽山は怒るだろうけど……」

志郎は一歩前に出た。

「許さなくてもいい。……けど、頼むから無視しないでくれ」

「無視？」

「この間、俺と目があった途端、ゴキブリでも見たみたいに逃げてっただろ？」

ゴキブリとは流石に思わなかったが、確かにあの時本能的に優菜は逃げた。後になって社会人として良くない態度だったと反省はしたが。

「昔散々苛めやらかしといて、今更何言ってんだと自分でも思う。だけど、今言っとかないとすげぇ後悔しそうだから」

「……」

「時々でいい、俺を視界に入れてくれ。頼む。何なら罵ってくれたっていいんだ。無視しないでくれさえしたら……」

「……何でそんな事言うんですか？」

「実は俺にもよく分からないんだ。……けど、無視して欲しくないんだ」

「別に……」

あの時逃げてしまったのだって、無視した訳じゃない。ただ目を合わせるのが嫌だっただけだ。この男の光の強い目が自分を射ぬくのが嫌なのだ。多分、昔から――

だが――

それは拘(こだわ)りと言うものではないか？

優菜は考えている。

冬木志郎の事は確かに嫌いだが、逃げ出したりすると言う事は、いつまでも過去の出来事に自分が囚われていると言う事だ。目の前の男の呪縛に縛られていると言う事に他ならない。自分はその事を認めたくなくて逃げ出したのだ。志郎の方は単純に無視されたと思

っているらしいが、その実拘(こだわ)っているのは自分の方ではないのか？
あの駅前での再会以来、常に胸の奥の方がいらいらと落ち着かない。だが、そんな事ではいけないのだ。折角教師になれたのだから、腹蔵なく職務に専念しなくてはならない。こんな所で引っかかっている場合ではない。今の自分は、何の弱みも無い大人なのだから。

「……あの時の事は」

「うん」

志郎は優菜の言葉を待っている。

「すみませんでした。変な態度をとってしまって」

「……」

「これからだってお世話になるのに、大人気なかったと思っています。おっしゃる通り、これからは社会人として普通に接していきたいと思います」

「ありがたい」

「だけど……やっぱりあなたの事は好きになれません。許すとか、許さないとかじゃなくて、子どもの頃の嫌な思いは胸に刺さったままだから」

「ああ……分かってる」

「でも、あなたがあの時のこと覚えていたなんて思ってもいなかったから……かなりびっくりしたけど……少しだけ気がすんだわ」

覚えられていた上、まさか、こんな場所に連れて来られるとは思ってはいなかった。その上、自分を無視しないでくれと乞われるように言われるとも……。この尊大な男が。
自分だけが固く冷たいしこりを胸の奥にしまっていた訳ではないと知って、優菜は驚いていた。

それならば私は……私たちは……いいえ、いいえ。この人とは相容れないの。昔も今も――

湧き上がる思いに急いで蓋をする。

「羽山……」

「だけど！」

志郎を見据える。

「昔の事はこれ以上話したくない。取りあえずは今度の体験学習の件、宜しくお願いします」

優菜は出来るだけ冷たくそう言って頭を下げた。

「それでいいよ」

顔を上げると志郎が少し笑っている。目尻に皺の寄った笑い顔は少し切なそうで、それを見て優菜は少しだけ悪い様な気がした。

「うん……それでいい。遅くしちまって悪かったな。……帰ろうか？」

「……」

帰ろうか――志郎はとても自然な風にそう言った。嘗(かつ)て誰とも一緒に帰った事が無かったこの道。なのに今、優菜は昔一番嫌いだった少年と帰り道を共にしようとしている。あの日ほどではないが、今日も夕映えが空を覆い、辺りを暖かく染め上げていた。

どうして――どうしてこんな事に……

軽く手を差し出す志郎を前に、優菜は途方に暮れていた。

髪を揺らす晩春の風はぬるい。そこには一筋の艶やかさが含まれている事に、優菜はまだ気づいてはいなかった。

13．トパーズイエローの風の中　1

「お世話になっております」

通行の邪魔にならないようにアーケードの脇に自転車を停め、優菜はリカーショップトオキの店先に立つ店員に挨拶をした。

午前中の駅前商店街は比較的空いているとはいえ、駅のロータリーにほど近いこの大きな酒屋は割合いつも人の出入りが多い。商店街のエントランスとしても目立つので、ここから客がアーケード内に流れ込んでいくのだ。広い店先には特売品の品物が種類別に並べられ、脇には缶ビールや酎ハイのダンボールケースがうず高く積まれていた。そしてその間を動き回る小さな影が見える。

五月の最終週の金曜日。曇り空の蒸し暑い日で、既に十軒近くの商店を廻ってきた優菜は額にしっとりと汗をかいていた。

「あっ、せんせぇ～」

「いらっしゃ～～～い！」

「俺たちがんばってるよぉ？」

途端に店頭でちょこまかしていた子ども達が一斉に優菜に気づいて、声を上げた。四人とも一人前に店のロゴ入りのエプロンをして軍手をはめ、すっかり店員になりきっているようだ。

今日は、年度始めから取り組んできた、葛の葉小学校五年生の校外体験学習の当日である。

「せんせい、来てくれたんだ」

クラスの体育委員でもある横山健太が大きな顔に一杯の笑顔を見せた。

「大丈夫？　お店にご迷惑をかけていませんか？」

「大丈夫、大丈夫。オレなんか、ビールのケース何回運んだと思ってるよ？」

「アタシはここの商品全部キレイに並べたんよ」

心配して声をかけた優菜に口々に元気な声が返ってくる。この店に来たのは男子二名、女子二名、いずれも新興住宅地の子ども達だった。

「お客さんはたくさん来る？」

「うん、結構来ました」

優菜の問いかけに小柄な竹中渉（わたる）が真面目に答える。

「竹中君なんか、お母さんが心配して来たんだよね～。ビール三ケースも注文しちゃってさ。その後も近くでウロウロしちゃって……」

はしっこそうな女子の小林麻子がちゃっかり報告する。この少女も横山と同じ体育委員だ。

「そうなの？」

「うわ！　言うなよ～」

渉は真っ赤になって困っていた。どうやら彼らなりにうまくやっていると見てとった優菜は、安心させるように皆に笑顔を振りまいた。

「はいはい。御苦労さま。ちゃんとお客を呼び込む役に立てているのね。でも、今日はみんなお仕事だから、おふざけは後でね。午後は感想文と活動内容を書いてもらう予定だから、しっかり動いて、人や物をよく見て、よく考えてね」

他の店で活動している児童たちにも与えた注意を繰り返して、優菜は子ども達を励ますように微笑んだ。

「はい！　頑張りま～す」

「あ、そのケース俺が持ってやるよ」

「うわぁ横山君、やっさし～～～」

優菜に応えるように子ども達は皆、張り切って作業に戻っていった。

「みんながんばってくれていますよ。元気がいいし、可愛いし」

おそらくパートの店員であろう、店頭のレジに立っていた小太りの中年の主婦がニコニコして優菜に応じた。

「あ、ありがとうございます。どしどし使って下さいね」

この店で優菜の受け持ちの店は最後となる。今日は午前中いっぱいを使って九十名余りの五年生全員が、体験学習をするためにこの広い校区中に散っている。だから、優菜たち、五年生担当者はクラスの枠を離れて、それぞれの地区に分けて子ども達の様子を見に朝から走り回っていると言う訳だ。車通勤の藤木や永嶋は農家や町工場の方を廻ってくれているので、自転車組の優菜は、比較的学校から近い駅前商店街を担当させてもらった。

「それであの……社長さんにご挨拶したいのですが、中におられますか？」

「ああはいはい。さっき出先からかえってこられたと思いますよ～。店長さんもいらっしゃいます。奥のドアからどうぞ？　あ、いらっしゃいませ」

店員はレジの前にカゴを置いたお客に対応し始めたので、優菜は急いでその場を離れた。店長さんはどうでもいいが、社長の悟朗にはきちんとお礼を言いたかった。

「……失礼します」

ためらいがちなノックと共に優菜は事務所に入った。

「やぁ、いらっしゃい」

「よぉ」

二つの声が重なる。

優菜の予想通り、社長とその弟の店長が事務所にいた。二人とも別の方向を見ていたのに、同時に優奈の方を振り向く。

「こんにちは、葛の葉小学校の羽山です。朝から子ども達がお世話になっております」

優菜はさり気なく視線を伏せてながら、丁寧に頭を下げた。

「ああ……ご苦労様です。聞けば、よくやっているようですよ？最初は声が小さかったみたいだけど、さっき見たら大きな声で『いらっいしゃませ』って言ってましたから」

事務椅子をくるりと回して、志郎の兄が朗らかに説明した。

「朝来た時にとにかく、挨拶は大きな声でって言ったんですよ。女の子達は恥ずかしそうにしていましたけど、男の子達は割合早く慣れた見たいです」

「ああ、あの身体の大きなヤツな。横山とか言う男子。アイツ見込みありそうだな」

カーキ色の作業着を着て、いつも以上に大きく見える志郎が近寄ってきたので優菜は我知らず一歩退いてしまった。

「そうでしたか、ありがとうございます。もうしばらくご迷惑をおかけしますが、体験学習は十一時半までですので、時間になったら声をかけてやってくださいますか？」

優菜は志郎と目を合わさずに頭を下げた。

「はい、承知しました。それまでしっかり御預かりします。な？志郎。先生もご安心を」

「はい。では、もう少しの間、子ども達をお願いいたします」

温厚な社長はおっとりと応じたので、優菜ももう一度礼を言って、その場を辞そうとした。

「おーい」

そそくさと事務所を出た優菜の後を、のんびりとした低い声が追いかけてくる。客も店員もいる中で、振り向かない訳にはいかなそうだった。

「はい？」

「ちょっと待ってな」

「何でしょう？　もう引き上げないと……」

優菜は声に少しだけ迷惑そうな色を滲ませたが、彼は頓着せずに背中を向けて何やら作業していた。

「これ持って行けよ。荷物になって悪いけど」

目の前に差し出されたのは大きなスーパー袋。お菓子やジュースなどでぱんぱんである。

「は？　いいえ、そういうお心遣いは遠慮させていただくことに……」

「いいからいいから。職員室で分けたらいいだろう？　どうせ賞味期限迫ってるんだし、持って行ってくれると助かるんだ」

「そうですよ。先生、持ってってくださいよ。俺たちだって葛ノ葉小の卒業生なんだし、差し入れと思って」

悟朗も奥から呼びかけた。

「あ……でも、その」

へどもど断ろうとする優菜に無理やりビニール袋を押し付けると、大きな体を折って志郎はすばやく耳元で囁いた。

「今夜空いてるか？」

「え！？」

「……来れそうだったら六時頃にあの場所で待ってる。時間はとらせないから」

「！」

ビニール袋をぶら下げたまま、固まってしまった優菜の鼻先でドアが閉まった。

「……では次は、商店街の報告を。羽山先生？」

五年生の学年主任の永嶋が優菜の方を見た。二週間に一度の学年会議の場である。

「はい。商店街では一番多くの児童が体験学習をしましたが、特に混乱はなかったようです。一軒に四人という人数配置も妥当だったと思われます。商店は比較的やる事がわかりやすいので、殆んどの児童は店の人の指示を受けて真面目に活動できたと聞いています。あ、一件。鮮魚店に行った、三組の寺井君が魚のエラで少し指を切ったそうですが、店の人が処置してくれました。ただし、生鮮食料品にはもう触れませんでした」

「寺井か……アイツは元気だけど、おっちょこちょいだからなあ」

途端にくすくす笑いが満ちた。学校には会議室がないため、打ち合わせや会議などは多くの場合、普通教室が利用される。五年生の会議の場所はもっぱら一組の担任である学年主任の永嶋の教室だった。机の上には優菜が冬木リカーショップから貰ってきたジュースとお菓子が配られていた。

「それで、後半は販売から離れて、もっぱら呼び込みをしていたそうです」

くすくす笑いが大笑いに変わった。

「ははは！　あいつは声がでかいから！　適材適所って訳ですね。店の人もよく見てくれてたんだなぁ、面白い」

三組の担当者、つまりの話題の寺井の担任の藤木が一番大きな声で笑った。

「はい。道行く人に一人一人声を掛けて回るので、すっかり人気者になったそうです。特にお年寄りに喜ばれて売り上げに貢献したそうですよ」

「確かにアイツは接客業に向いていそうだわ、愛想いいし。勉強はいまいちだけど」

「こら、藤木先生。せっかく褒めた後にけなすのはよくないわよ。分かるけど」

永嶋も笑っている。散々準備を重ねてきた今日の行事を無事終えて、いつも長引く会議にもどこかほっとした雰囲気が流れていた。五月初めの春の校外学習に続き、一学期の大きな行事が又一つ終った。初夏を迎えた季節の窓外はまだまだ明るく、校庭には校庭解放で球技に興じる児童たちの姿がまだ見えている。

「えっと一つ気になる事が……」

おずおずと優菜が言い出した。

「何？　羽山先生」

「今回の体験学習は概ね、児童の希望通りに体験場所を割り振りま

したが、人数の関係で希望通りに行かなかった子もいます。そういう子の意見も、もう少し聞けたらと思うんですが……」

「なるほど。ウチの女子の一部は最初ぶーぶー言っていたな。でも受け入れてくださる体験場所には限りがあるし、それぞれの事情があるから、全て希望通りにとは、これからもいかないなぁ……後、必ずしも仲良しグループで、チームが組めないことも多いし……」

と、藤木。

「うん、それはそうです」

永嶋も頷いた。

「でも、仲良しグループでいくと、却っておしゃべりばっかりで、態度があまりよくなかったと前年度の反省にも書かれているから、これはしょうがないかも」

「そうですね……今年から男女混合グループにしましたが、これもよかったですね？」

「ハイ。お互い、異性にいいところを見せようと張り切っていた様子が伺えました」

優菜も見て来た感想を述べた。

「では、今回の校外体験学習は概ね成功したと言うことで……提出した感想文にも前向きな意見が多かったようですし。この案件はこれで終わりにしますね。……羽山先生、今回の記録を綴じてファイルしておいてくださいね、次は六月の土曜参観について……」

学年の会議はいつも長引く。主任の永嶋が滞りなく案件を進めていったが、全ての懸案事項がすんだ時にはさすがに長い初夏の陽も傾きかけていた。

職員室に戻った優菜はざっとファイルを見直して今日の出来事を思い返した。

やっぱり、希望が叶えられなかった子はかわいそうだわ。やる気は充分だったのに……残念そうだった。私の決め方が悪かったのかもしれないし……このことは記録しておこう。

でも、みんな本当に楽しそうに活動してくれてた……できたら二学期にもう一度やれたらいいのにな……せっかくがんばったのに一度きりなんて勿体無い。次にはもっとうまくできるだろうし……あ。

優菜ははっとなった、もしこの授業を繰り返せば、またもや志郎の世話になることになる。彼とは半月前に話をして以来、今日、久々に顔を合わせた訳だが。

『あの場所で待っている』

志郎は確かに耳元でそう囁いた。

どういうつもりなんだろう……。それに大体あのって、どこよ？一体どこの事を言っているのかしら？

優菜は眉を顰めてバン、と音を立ててファイルを閉じた。

考えても仕方が無いわ。いつだって自分本位なんだから。あの場

所だなんて、まるで二人の秘密の場所みたいじゃない……あんな奴と共有の代名詞なんて持ちたくないわ。まったく気分が悪いったら。私、知らないわよ！　まだノート点検だって終わってないし。

「羽山先生？」

余程妙な顔をしていたのか、前の席から永嶋が不思議そうに優菜を見ていた。

「あ、いえ、何でもないですよ」

優菜は慌てて笑顔を作ると、小さく溜息をついて今日集めた理科のノートの山崩しに取りかかる。

「でもなんか険しい顔よ？　疲れた？」

「ええ少しだけ。やっぱり初めての体験で緊張しましたし……」

心配そうな永嶋の言葉に如才なく答えて優菜はノートに眼を落とした。……あの場所とは一つしかあるまい。つまり子どもの頃、優菜が志郎と別れ、先日志郎からやり直そうといわれた場所。何の変哲もないただの道端のことだ。路肩に地道の名残があって、古い用水路がそばを流れているだけの。

しかも、校区だし。距離はあるけど、職員室から見通せるし。駅までの道順で通らざるを得ないところだなんて……確信犯すぎる。

三十冊のノート点検を終えて優菜は壁の時計を見上げた。六時半。既に勤務時間を大幅にオーバーしている。それなのに職員室にはまだ半数ぐらいの教師が居残って忙しそうに立ち働いていた。

優菜はロッカーに会議録ファイルを放り込み、ついでに校門を見渡せる窓辺に立った。通学路でもあり、優菜の通勤路でもある、まっすぐに伸びた一本道が見える。道は駅の方角へと伸び、町並みを超えてさらに宵闇の色に染まる山々に続いている。

車は……見えないな

目を凝らしても近くにに白い軽トラックは見えなかった。待ちくたびれて帰ったか、店の仕事が立て込んで来る事が出来なかったに違いなかった。何と言っても志郎も優菜もお互いの連絡先を知らないのだ。まさか職場や店に掛ける訳にもいかないし、押しかける訳にもいかない。つまり、打つ手なし。自分は別に悪く無い。そう考えて優菜はほっと肩を落とした。

いいや、帰ろ。金曜日だし、今日は概ねうまくいった事だし、疲れたし。何かおいしい物を買って帰ろう。

そう思うと元気が出た。手早く荷物をまとめ、同僚に挨拶をして職員室を出る。昼間は蒸し暑かったが、外に出るとさすがに涼しい。曇天の一日だったので空を焦がすような夕焼けはないが、気持ちのいい風が夜の香りを運んでいた。今日一日酷使した自転車を引き出すと、優菜は強くペダルを踏みしめた。一刻も早く家に帰りたかった。

ところが、そううまくは行かなかったのである。

１３．トパーズイエローの風の中　１（後書き）

次回はそれほどお待たせしないと思います。

１４．トパーズイエローの風の中　２

「羽山！」

「！？」

黄昏の風が吹く中、気持ちよくこいでいた自転車の後ろからいきなり声をかけられ、優菜は驚いて振り返った。

ほとんど駅前と言ってもいい、ロータリーに入る手前の道。「あの場所」からはかなり離れたところである。実はさっき、そこを通りがかった時、優菜は一応お義理できょろきょろしながら周りを見渡してみた。しかし、近くに軽トラックも、志郎らしい人影もなかったので、同じように駅へと帰宅する同僚達に見咎められる前に立ち去った方がいいと判断し、そのまま普段どおり駅を抜けて帰る事に決めた。そして自転車をすいすいと進めている間に、志郎の事などきれいに忘れてしまっていたのだ。

「あ」

「来てくれたのか。さっきまで待っていたんだけど、なかなか来ないから引き返してきたんだ。すまん。もしかして待ってた？」

「いいえ、ただの帰宅途中ですけど」

「あ、そうか。それにしても遅いな」

志郎は別に気にしていない様子で頷いた。昼間と同じカーキ色の作業着だったが帽子は外している。優菜は自転車に乗ったままだが、長身の彼に見下ろされると不愉快この上ない圧迫感があった。別に尊大でも横柄でもない普通の態度なのに。

やっぱり、嫌いだわこの人。立ってるだけで邪魔！

「これでも早い方なんです。でも今日は子ども達がお世話になり、ありがとうございました。頂いたお菓子は皆で分けました。喜ばれましたよ。では……！」

優菜は気持ちが顔に出ないように馬鹿丁寧に挨拶すると、再び自転車をスタートさせようとした。途端に優菜のハンドルを大きな腕が捕らえる。

「きゃ！」

「すまん……もう少しだけ」

灯り始めた街灯の下で、形のいい眉が申し訳なさそうに下がった。表情の幅が大きい男だ。顔の造作が整っているだけに何となく見てしまうのも癪（しゃく）に障る。

「は？　なんでしょうか」

「や、別にどうと言うこともないんだが……今日の事でちょっと気になる事があって、センセイに言っといた方がいいかなって思った

んだ。ま、立ち話もなんだから……」

「それで気になる事……ってなんでしょう？」

リカーショップの奥の事務室。体験学習の依頼の時と今日の午前中にも訪ねたから、ここに入るのは三度目である。奥に置かれた応接セットのソファに浅く腰掛けた優菜の前に、志郎は冷たい缶コーヒーを置いた。

「缶で悪いな。俺はコーヒーとかそういうもん、上手く淹れられないもんだから」

本当は立ち話でさっさと済ませてしまいたかった。だが、こんな目立つ店先で彼と話しこんでいたら、目立って仕方がない。いつ、学校関係者や、酒屋の客として保護者が通りがかるかもしれないのだ。かといって近所の喫茶店でもまずいだろう。「飯でも？」と誘われたのを素気無く断り、仕事の話なら志郎の店の事務所で、と優菜は折れたのだった。

既に店は品揃えを夜のシフトに切り替えている。つまり調味料やジュースよりも酒類や、おつまみにもなる菓子などが店頭の大部分を占めていた。レジ係りも午前中に見たパートの主婦の姿は既に無く、替わりに二十代前半らしい男性に変わっていた。忙しい時間帯らしく、数人の従業員たちが立ち働いている。

「お構いなく……それで？」

出された缶コーヒーには手もつけず、そっけなく優菜は応えた。

いい年をした女が人前で缶コーヒーのラッパ飲みができると思っているのかしら？　せめて、ペットボトルのアイスコーヒーをグラスに入れて出せばいいのに……子どもじゃあるまいし、と優菜は心の中で情け容赦なく志郎をこき下ろす。

「いや……余計なお節介かもしれないが、今日のアレな」

「体験学習のことですね？　アンケート用紙に書けない事なんですか？」

まさかとは思っていたが、話題が自分の守備範囲だったことにほっと胸をなでおろし、優菜は落ち着いて問い返した。

「ああそれな。すまん、ああ言うの書くの苦手で、どっかやっちまった。……でさ、俺はシロウトだけど、なかなかいい企画だったと思うんだ。だけど聞いた話では年に一回きりだって言うじゃないか。俺たちの時代にゃなかったけどな」

「はい、そうです。確か五、六年前から五年生で取り組んでいる活動って聞いています。いろいろ試行錯誤して今の形に落ち着いたらしいですが」

「オレは授業のことはよくわからないが、あいつら、結構真剣にやっていたと思う。たった二時間ちょいのことだったけど、どんどん慣れてきて、特に最後の方のチームワークはなかなかのモンだったな」

活動の巡回中は、仕事中なので店主や社員達から話を殆ど聞く余裕が無かった。だからこそ、アンケート用紙を配って後日回収と言う事になっている。だから、今日の学年会議でも子ども達の様子は、

教師側からしか伝えられなかったのだ。

「……そうなのですか？」

志郎の話に興味を持って優菜は尋ねた。

「うん。はじめはあいつら確かに途惑っていたし、俺が怖いらしくて全然動けないでいたな。俺だって正直めんどくさいなと感じてはいたんだ」

「……はい」

「けど、そのまんまじゃ得るものがないんだろ？　だから最初は接客じゃなくて、ものを運ぶとか商品を並べるとか、目に見える仕事を与えると案外きちんとやる。そんで褒めてやると気持ちもほぐれたのか、次は何したらいいとか聞いてくるんだ。だから俺ももうあんまり気を使わないで、普通のバイトに指示を出すようにズバズバ色々言ってやるとだんだんと動きがよくなった」

「へぇ～……」

「その内、女の子が俺達を真似て、お客に『いらっしゃいませ』とか言いだしてな。これには俺もちょっと驚いた。こっちが何にも言ってないのに自分から挨拶が出来たんだ」

「多分小林さんだわ」

優菜は頼りになる体育委員、小林麻美を思い浮かべた。

「そうそう。髪の短い子な？」

「ええ」

「そんでだんだん解れて来たんで聞いてみたけど、あいつら皆、若宮台の子らだってな？　それは意図的に選んだんか？」

若宮台というのは新興住宅地のことで、新しい地名である。子ども達の希望もあったが、この商店街は昔からの人が多いので、交流にもなるだろうと新興住宅地の子ども達を地の人々の間に交えたのだった。それは、この体験学習がややもすれば親の世代で断絶しがちな元々の地の人々と、新興住宅地の人々を結びつける一つのきっかけになればと、学年の企画会議で何度も話し合って決めたことだった。しかし、まさか志郎がそこまで洞察したとは思わなかった優菜は、内心驚いた。

「ええ……そうです。地域を知ろうというのが単元のねらいの一つだったから……サラリーマン家庭で核家族の多い地域の子ども達に、一家でお店を切りもりしている商店街の様子も知って欲しかったと言うのもあって……」

「そうか、なるほど。やっぱり先生達も色々考えているんだな。色々聞いてみたけど、夕飯はほとんど母親と二人だけで食べてる家の子が二人いたな。オヤジが単身赴任の家を含めてな。共稼ぎの家もあるし。平日に親が……特に親父が家にいて店をやってるなんてって、皆びっくりしてたな」

「う～～ん」

優菜は素直に感心した。子ども達は普段教師には見せない顔や、しない話を色々志郎に示したようだった。そう言えば今日の感想文

の中にそういうのがあったっけ？　と優菜は思い出した。子ども達の驚きは素直だったが、協力者である志郎もそのように感じていた事に優菜は内心驚いている。

「色々話しているうちに結構仲良くなってさ、結局最後は結構役にたってくれた。そんで、あいつら学校に帰る前に何つったと思う？」

「さぁ……で、なんて言ったのですか？」

知らず優菜は身を乗り出して志郎に尋ねた。

「これから缶ジュースを飲むたびに、ワンケースの重さを思い出すだろうってさ。へぇ、なるほどなって俺は思ったんだ」

「……そんなことを」

そんな事を言うのは横山君だろうか？　確か感想文には、お店と言っても力仕事が多く、大変な仕事でした。と、綴っていた筈だ。作文としては真面目な文章だが、実際にはこんな風に感じていたのだ。面白い。子ども達の本音をもっと聞きたかったと優菜は思った。

「ああ。俺もなるほどなって思った。きっと正直な気持ちを言ってくれたんだと思うんだ。二学期とかにもう一度取り組んだりはできないのか？　次はもっとうまくできるぞ」

「う～～ん、それはなんとも……こちらのお店は好意的に受け止めてくれたかもしれませんが、そうでないお店もあるかもしれません。地域の役割として、年に一度のボランティア活動だと割り切ってやってくれている人たちもいるでしょうし……。第一、年間行事計画に今から割り込むのは難しいと思います。よほど強い保護者の要望

があれば別かもしれませんが」

今日の子どもたちの様子を見て同じ事を考えていた優菜も真剣に答える。

「ふ〜〜ん、そういうもんか。絶対いいと思ったんだけどなぁ。やっぱり大変だな、センセイってのは」

実のところ、話の中身よりも、優菜が珍しく長い話をしたことに志郎は驚いていた。だが、そこは表に出さないで話を合わせる。

「はい。大変なのです」

ふっと優菜は笑った。おかしい。仕事の話なのになんとなく面白い。終ったばかりの体験学習だか、別な切り口が見えてくる。これは学年に報告した方がよさそうだ。優菜は志郎が見つめている事に気づかずじっと考え込んでいた。いつの間にかテーブルに置かれた缶コーヒーが汗をかいている。

「……羽山はすっかり先生だな」

「……」

穏やかな呟きに優菜ははっと顔を上げた。しまった。少しぼんやりしていたようだ。もうこの会見は切り上げなくては。先日無視をしてくれるなと言われたが、もう充分礼儀は尽くしただろう。思いがけず興味深い話も聞けたし。だが、立ち上がろうとする優菜の気配を察してか、志郎が再び話を向けた。

「楽しいか？」

「え？」

何をまた、唐突に。この男は。

「だから、仕事が」

「あっ、ああ……楽しい……です」

「へぇ。子どもが好きか？」

「ええ……はい」

優菜は素直にこくりと頷いた。どうやら本心らしい。

「子ども達のお話し、面白かったです。貴重なご意見ありがとうございました。学年に伝えておきます」

話しの方向が変わったのを察し、優菜は幾分固い声になった。ここが腰を上げるタイミングだ。

「ではこれで失礼します。コーヒーごちそうさまでした」

「飲んでないじゃないか」

「あ……じゃあ、頂いて行きます。ありがとうございます」

コーヒーをトートバックに入れながら優菜は立ち上がった。

「俺も、もう上がりなんだ……送ってもいいか？」

「……いえ、自転車ですから」

この間は不本意ながら成り行きで、家の近くまで軽トラックで送ってもらった。だが、今日はそんな事にはならない。そもそも自転車通勤なのだから、送ってもらう必要はないのだ。優菜は忙しげにバッグを肩にかける。

やっぱ、そううまくいかないよなぁ。

予期していたとは言え、志郎は明らかな落胆を感じていた。午前中、児童の活動を見に来た優菜は、別人のように生き生きと子ども達と笑いながら喋りあっていた。自分を前にした時のお固い様子とは大違いだ。押しつけるように菓子を渡す振りで「待っている」と告げたのは、何とか彼女と話をしたかったからだ。明らかに迷惑そうな優菜に、興味を持つような話題を無理やり捻り出して待っていた。勿論、今日の課外授業について感じたことは事実だが、それは別に学校から配布されたアンケート用紙に書けばすむのだから（無論、無くしてなんかいない）、余り口実にはならない。だが、優菜は誘いに応じてくれたのだ。子ども達の話で釣ったのは正解だった。余程仕事に前向きなのだろう。本当は食事でもしながら話したかったのだが、それはあまりに虫が良すぎる。こうして店に来てくれただけでも僥倖（ぎょうこう）だ。

ダッサダサだな、俺。

今まで女性を誘うのに苦労をした経験がない志郎は、自分にこんな面があったのかと、内心自嘲する。無愛想で、必死に自分を警戒

しているこの女に、少しでいいから自分と言う人間を見てもらいたい。芝居の台本のように、自分の気持ちにト書きをつけるとすればこんな感じだろうか？　と志郎は思った。

だが、優菜は興味を引かれたようによく喋った。無防備に豊かな表情を晒し、思いがけず笑顔まで見せてくれたのだ。いつも沈んでいるような物静かな彼女にこんな一面があったとは。もっと深く聞きたい、見たい、そして知りたかった。

「あのな……」

何とか引き止める方法は無いものだろうかと志郎が再び口を開いた時、事務所のドアが開いた。

「こんばんは～。シロちゃん、いるんだって？」

勢いよく頼子が入ってきた。

15．トパーズイエローの風の中　3

「あれ？　お客さんだった……？」

頼子はぺこりと頭を下げた。蜂蜜色の巻き髪が揺れて、銀色のピアスが蛍光灯の光を弾く。流行のぴったりした短いシャツに三段のレイヤースカート。それにキャメルのニーハイブーツを合わせた頼子は、流行に疎い優菜の目にも、年齢よりずっと若く素敵に見えた。

「えっと……」

顔を上げ、優菜を認めた頼子の大きな瞳が一瞬訝（いぶか）るように細められたが、すぐに思い出したように見開かれる。

「確か……は～……羽山さん？」

「あ……はい。こんばんは」

優菜もとりあえず頭を下げた。よく覚えていないが、この春先に志郎と会った時に彼の隣にいた女性だろうと見当をつける。あの時は志郎と出会ってしまった動揺の方が大きすぎて顔をよく見ていなかったが、自分のことを知っていると言うことは、おそらくここでの同級生だったに違いない。名前すら出てこないが。見た感じではとてもそんな昔の、しかも優菜のような存在を覚えているようなタイプには見えないから、きっとあの後、志郎から自分のことを聞くなりしたのだろう。

「羽山さんがなんでここに？」

声にほんの少し硬さを帯びさせて、頼子は志郎に尋ねた。

「ああ、今日な、小学校の体験学習があって、うちの店も協力してさ。その関係で」

志郎がうっそりと応える。

「体験学習？　何それ？」

頼子は優雅に細い弧を描く眉を上げ、重ねて問う。

「ええと、授業の一環で、子どもらが学校ではできない職業体験をするんだそうだ。なぁ？　そうだろ？」

「はい、今日はお世話になっていました」

志郎があからさまに話を振るので、あくまでそれだけの事で立ち寄っただけだと言うことを言外に匂わせ、優菜が丁寧に応じた。

「へぇ～、そんなのがあったんだ……ちっとも知らなかったよ」

「別に言うほどのことでもないだろ」

「まぁね。……えっと羽山さん、私のこと覚えてる？　昔、おんなじクラスだった田端、田端頼子。」

「……ごめんなさい」

優菜は正直に謝った。名字も顔も覚えがないのだ。だが、頼子という名前にはうっすら覚えがあるような気がした。持ち主の印象とは裏腹に割りと珍しい昔風の名前である。しかし、具体的な事柄は何も思い出せず、名前の響きが好きだった記憶がかろうじて蘇っただけだった。

「あんまりよく覚えていなくて……すみません」

優菜はもじもじとバックを持ち替えた。せっかく帰ろうと思っていたのに彼女のせいで、タイミングを失ってしまった。さて、どうやってこの場を切り抜けようか？

「ああ、別にいいよ。だって羽山さんここにいたの短かったらしいし……私だってこの間偶然会ってから家で写真とか見て、やっと思い出したくらいだから。……小学校のセンセイしてるんだって？」

やっと、と言う部分を少し強調して、頼子はあっけらかんと続けた。

「はい」

「へえ～、すごい。真面目そうだし、そんな感じだわぁ。何かの縁で帰ってきたんだ～。誰かこっちで知ってる子いる？　もう会った？」

「いいえ誰とも。元々あんまり長くいなかったから……ここには……たまたまこの県で採用試験を受けたら、合格して採用になっただけで」

「そう？　あ、でも、シロちゃんの事は覚えてるよね？　だってあれからね、羽山さんの事苛めたことあるって真面目に反省してたから～。よく言うじゃん、苛めた子は覚えてなくても、苛められた子はその事を絶対忘れないってさ。ごめんね？　彼女の私から謝っとくね」

頼子は無邪気に優菜に笑いかけた。

「おい、お前に謝って貰わなくてもいい！」

「だってぇ～～」

「……」

優菜はますますいたたまれなくなった。それでなくとも今日は校外での学習の為、朝からバタバタとしていて疲れているのだ。今更同級生と知っても、今子に特に親しみも湧かないし、彼女が精一杯自分のことを警戒して、マシンガンのように喋り続けるのを聞くと余計にしんどくなるような気がした。

私のことなんて歯牙にもかける必要ないのに……

持ち物を見ただけで、彼女が洋服や小物に金をかけているかがわかる。そして、持ち物も主を裏切らず、美しく引き立てていた。それに比べて自分はいかにも見栄えがしないだろう。それなのになぜ、この人はこんなにイライラしているんだろうか。

不意に優菜は何もかもどうでもよくなった。疲れているからだ。

「では、私はこれでお暇します。今日は本当にありがとうございました」

頼子に小さく会釈をし、志郎に向かっても極めてビジネスライクに挨拶をして優菜は席を立った。

「ああ……済まん。……またな」

これ以上はしょうがないと言うように広い肩をすくめ、志郎は出てゆく優菜を見送った。静かにドアが閉じられる。

「……で、何の用だ？　約束してなかったろ」

頼子を振り返って志郎は尋ねた。

「何って、金曜なのにちっともケイタイ繋がらないし……仕事用には連絡するなって言われてるからしなかったんだけど……だから、直接来た。ね？　今日はもう上がりでしょ？　ご飯食べにいこ。どうせまだでしょ？」

「悪いな。お前は休みかもしれないけど、俺は明日も仕事だし……」

優菜と話をする為には食事に出てもいいと思っていたのに、我ながら勝手なものだと志郎は思った。こんな風に自分本位だから、優菜に嫌われるのだろう。

「ええ～、ご飯だけでいいから……遅くならないようにする。近くでいいし」

「……」

「ねぇ？　ご飯だけ」

前屈みになり、腕を後ろで組むのは頼子がものを強請(ねだ)る時によくするポーズだ。以前は可愛いと思っていたこの仕草を、志郎はややうんざりと見下ろした。しかし、実際頼子はキレイな女だと思う。選ぶ服のセンスもいいし、流行の色に染めた髪はマメに美容院に行くせいで輝くような艶がある。志郎は立った今立ち去った優菜の姿を思い浮かべた。

襟の立った七部袖丈の白いシャツに深い色のジーンズ。装身具は一切身につけていなかった。職業柄もあるのだろうが、短く切りそろえられた小さな爪は、都会のネイルサロンでスパンコールをちりばめた頼子のそれとは対照的だった。

「仕方がないな……」

志郎は苦笑を浮かべつつ応えた。そう、仕方がない。今自分は頼子のカレシなのだから。

俺は一体何をどうしたいんだ……

「ほんと？　やり～！　嬉しいよ！」

志郎の自問を破るように、頼子が輝くような笑顔を浮かべて腕に縋りつく。髪からは甘い香りが立ち昇った。

「着替えてくる」

ぼそりと告げて、志郎は事務所の外にある階段から店の上に上がっていった。

「シロちゃん、もう、さっきからお酒ばっかり。ちゃんと食べなよ」

テーブルの上には志郎が好みそうなボリュームのある料理が並べられている。学生時代バスケットボールをずっとやっていた志郎はかなりの健啖家(けんたんか)だ。

「ん？　ああ、食べるよ。お前も食べな」

「私はこんなに食べらんないよ？　脂っこいものばっかりだし。シロちゃんのためにオーダーしたんだよ？　ほら、どうぞ」

頼子はぼんやり考えこみがちな志郎の取り皿に、トンカツや鶏肉のチーズ焼き等を具合よく乗せてやった。食べ物を前に二の足を踏むこの男を頼子は見たことが無い。しかし、志郎は珍しく余り箸をつけずに麦焼酎の湯割りばかりを飲んでいる。

「体調でも悪いの？」

「いんや？　俺はすこぶる健康だよ」

「ならいいけど……なんだか元気がなさそうだから」

「そか？」

「うん……この間からシロちゃんちょっと変」

「……」

「あの……羽山さんに会ってから」

「……ああ、そうかもしれん。ヨリ、お前、結構鋭いな」

わざとらしい陽気さで志郎はグラスの焼酎を煽った。しかし今夜の頼子は確かに勘が良いようだ。

「褒められたって嬉しくないよ。何？　あの人シロちゃんに何か言ったの？」

「なんも。寧ろ言ったのは俺かも……」

「え？　何？　何て言ったの？」

「言ったというか……」

志郎はたちまちつい口を滑らせたことを後悔した。彼女に対する感情は、自分でも説明のできない複雑で奇妙なものなのだ。当の優菜にもちっとも伝えられていない。自分の気持ちをもっと突きつめてから、そして優菜と今よりもよく知りあえてから話をするべき事柄なのだ。だから頼子のような女に、納得させるように伝えること等、絶対に無理な相談である。しかし、頼子は酷く興味を引かれる様子できらきらと志郎を見つめている。

「何よ〜、教えてよぅ。私には話せない事なの？」

「そんな話じゃない……お前も言ったろ？　俺、ガキの頃率先してアイツのこと苛めてた。そのことずっと気になってて、再会した機会にケジメをつけようと思って……」

「謝るってこと？」

「それができたらいいんだけどな」

「でも、謝らないより謝った方がいいじゃん。シロちゃんえらいよ」

「ちっともエラかねぇ。そんな単純な話じゃなく……俺が自分の気を済ます為に謝ったって、本当に謝ったとは言えないだろ？」

「でも、もう十年も昔の話なんだし、フツーは許すよ。何？　あの人、シロちゃん謝っても許さないって言ったの？　それで凹んでんの？　ひっどぉ。それでも先生なの？」

「……」

ほら、伝わらない。すっかり面倒になって志郎は呻きたくなった。

「いや……実はまだ謝ってないんだ」

「ええ？」

もし志郎が真面目に謝ったとして、頼子の言う通り、優菜はあっさり許すと言ってくれるとは思う。

だが、それがなんになる？

自分の気持ちを軽くする為に謝罪した志郎に、優菜はどうでもいい事のように、気にしないでくださいね、と言うだろう。そして、二人の関係はそこで終わりだ。優菜はそれ以上自分を踏み込ませてはくれないだろう。二人はこの十年間そうであったように、何の関わりもないアカの他人に成り果てる。それだけはどうしても嫌だった。

「だって、偶然再会したからってだけで、いきなり『昔苛めてごめん』って言われたとして、お前どう思う？」

「私なら『いいよそんな、昔のことだから～』って言うと思うけどなぁ。そうじゃない？」

「……」

頼子は無邪気に答えた。何の迷いもなく。それは頼子がいじめられた経験はおろか、今までの人生で特に苦労をしてこなかったからだ。自分がそうであったように。志郎はそう考えた。

「それにシロちゃん、特に暴力ふるった訳でもないでしょ？　良く覚えてないけど、面と向かって悪口言ったり、ちょっとした嫌がらせをしたくらいなんじゃないの？」

「……充分嫌な奴じゃないか」

志郎は吐き捨てた。だから話したくは無かったのだ。もう志郎は頼子の前で優菜の話をしたくなかった。

「とにかく、もう少し俺は考えたいんだ。謝る時にはちゃんと言おうと思っただけだ」

「そんならあの人と事務所で何を話しこんでいたの？　あたしが入ってった時、なんだか妙な空気だったのよね」

恋する女の勘で何かを感じ取ったのか、頼子は声のトーンを強くし、テーブルにぐっと身を乗り出すと志郎を見つめた。志郎はそんな頼子に小さく溜息をつく。

「違う。今日は仕事の要件で……言ったろ？　今日の小学校の体験学習があったって。その事で気づいた事を少し話していたんだよ……それだけだ」

「ふぅ～ん」

頼子の大きな瞳が揺れる。不安を感じているのだ。

「じゃあ……もう会わないの？」

「分からない。俺から押しかけたらあいつはドン引くだろうし……」

「もう……真面目なんだから……放っておいたら？　それとも……あの人が気になるの？」

本当なら馬鹿を言えと笑って、恋人である頼子の懸念を払拭してやるのが、付き合っている恋人の役割なのだろう。だが、今の志郎にその優しさを示してやるゆとりは無かった。寧ろ、頼子が感じている事の方が正しいのだ。

「おい、変な風に言うなよ」

その言葉は頼子の為ではない。

「だって妙に拘(こだわ)ってるから」

「ヨリが思うような事じゃない」

少なくとも今はそうではない。だがこれからは――それは志郎にも分からない。

「ならいいけど」

表面だけのやり取りが続く。

「ああ。今日は本当に学校の行事について俺が思った事を言っといただけだ。今日起きた事はなるべく今日処理するのがいいんだ。商売でも同じさ」

なるべく嘘が混じらないように志郎は説明する。頼子は少し安心したようだった。

「シロちゃんらしいなぁ……思ったらすぐ実行なんだね」

「え？」

確かに優菜と話したいと思って口実を作って引き止めた。だが、言いたい事を伝えられた訳じゃない。今日だけでなく、この間の道の上でもそうだ。大体自分でも何が言いたいのかも掴めていないのだ。ただ、自分を素通りして欲しく無くて、それだけをやっと伝え

られただけで。

自分でもほとほと嫌気がさしているのに。

突然色んな事がよくわからなくなり、志郎はそれを誤魔化す為、並んだ料理を猛烈に攻撃し始めた。先に酒を進めてしまったが、さすがに腹は減っていたらしく食べ始めればどんどん食べられる。頼子は志郎が食べるのをしばらく見守ってから、そのイキオイに飲まれたかのように自分も少し皿に手をつけた。

思ったらすぐ実行か――

「そうだといいけどな」

苦々しく志郎は呟く。

「そうだよ。私が付き合おうって言った時も直ぐうんって言ってくれたしね。あん時は嬉しかったなぁ」

その時の事を思い出して頼子はやっと笑った。

「……ごめんね？」

「なんで謝るんだ？」

「色々しつこく聞いちゃって。それにちょっとびっくりしたから。シロちゃんがあんまり羽山さんに拘るもんだから。だからちょびっと妬いちゃったの」

「……」

コイツは侮れない。と、志郎は思った。自分が悪いように振舞いながら、ちゃんと志郎に釘をさしている。お前の彼女は自分なのだと。優菜にはもう会うなと。

「まぁ、でもさ。あんまりくよくよしないでおこうよ。シロちゃんの気持ちも分かるけどさ」

頼子はものわかりのいいところを見せた。これでこの話はもう終わりだというように。

「ね、こんどウチに来ない？　ママもシロちゃんに会いたがってるって言ったでしょ？　次のお休みは何時？　平日でも大丈夫だよ」

お得意のきらきらとした笑顔は大抵の男を懐柔してしまうだろう。だが、志郎の気分は重くなるばかりだった。

「分からない……」

「そ？　なら、今度シロちゃんのお父さんにお店で会ったら言っとくよ。私の彼氏にお休みくださいってね？」

「……おい、勝手に……」

そうだ。現実はこれなのだ。最初の思惑とは違って、いつの間にか頼子とは両家公認の仲みたいになっている。このまま行けば行きつく先は目に見えていた。それは大変に不本意である。頼子とは去年首都から帰ったばかりでぶらぶらしていた時付き合いを申し込まれ、とりあえず可愛い女だと思ったから軽い気持ちで付き合い始めただけだったのだから。我ながら、吐き気がするほど軽薄で、浅慮

な話である。

結局、やった事のツケは自分が払うしかないんだって事だよな。

志郎は次第に料理の味が分からなくなってくるのを感じていた。

16．トパーズイエローの風の中　4

教会でのクリスマス会は初めてだった。
以前から本の挿絵などで外国のクリスマス風景に憧れていた優菜は、近所に新しく建ったカソリック教会が、小学生以下の子供を招待してくれるという話を聞いて、ずいぶん前から密かに楽しみにしていたのだ。普段、あまり優菜を構ってやれない彼女の母親も、自分の服を直したよそ行きを着せてくれると言う。
そして待ち焦がれた二十四日のイブ。クリスマスプレゼントにと母が買ってくれた青いサテンのリボンを長い髪に巻くと、優菜は胸を高鳴らせて出かけたのだった。

結果は無残なものだった。
もしも思いだけで人が殺せるのなら、優菜は志郎を殺していたかもしれない。
それほど志郎を憎いと思った。
実際は頑なに顔を上げず、志郎の顔など見ていなかったから、つぶれたケーキの向うに立つズックを履いた少年がどんな顔をしていたかは知らない。知りたくも無かった。
「かっわいそ～～～シロちゃん、ひど～～い」
走り去る優菜の後ろから楽しげに囁いた女子は、頼子の声をして

いた。くすくすと笑う合う声が優菜を追いかけてくる。志郎も笑っただろう。

そのまま直ぐに帰ると、どうしてそんなに早く帰ってきたのか母親にいぶかしまれるといけないので、行き場のない優菜は家の近所の神社で一時間ほど過ごした。そこはとても静かで誰も来ず、気の済むだけうろつく事が出来た。一二月の寒さはちっとも苦にならなかった。ただ、教会のクリスマスに行こうと思った人間がここにいる事を、神社の神様はお怒りにならないのかな、と不思議に感じたことはよく覚えていた。

カミサマは私を笑わない。日本のカミサマだって、外国のカミサマだってみんな優しいはずだわ。

見上げた大木の梢の向こうの空は曇っていて、今にも雪が降り出しそうだけれども。

あれ？　空が変……ああそうか、雪だ。雪が降ってきたんだわ。だって、空があんなに滲んで、近くにに見えるんだもの。

優菜は、冷たい鼻先を空に向け、涙が流れないように大きく目を見開いた。

「あ……あれ？」

目に入ってきたものは、自分の部屋の天井だった。窓を閉めてあったせいか室温は高く、薄い上掛けは腰の辺りまでずり下がってい

た。先ほどまで見ていた遠い日の一二月の空は、天井に貼られた安っぽい白いクロスだった。

夢……。

優菜は大儀そうにまとわりつく長い髪をかき上げた。もうすぐ入梅だと昨夜のニュースで言っていたが、確かに二三日前から少し蒸し暑くなってきたようだ。。

「九時か……起きないと。でも、なんであんな昔の夢を見たんだろ？」

季節だって今と全然違うのに、と優菜は大きくため息をつく。重苦しい気分だった。そのままごろんと反対方向に寝返りを打った。昨日の疲れが取れないのか、体がいささかだるい。

理由はわかっていた。忙しかった昨日の終わりに、かつての同級生二人に会ってしまったからだ。会いたくもないのに会って、聞きたくも無い話を聞かされた。それがフィードバックして自分に昔の夢を、それも嫌な思い出の夢を見させたに違いない。

あの日、優菜を取り巻いた、たくさんのくすくす笑いの中に頼子がいたかどうかは実のところ覚えていないが、夢で笑った少女は確かに昨日聞いた、大人の頼子の声だった。

気にしすぎなんだわ。しっかりしないと。

狭い街のことだから、これからも顔を合わせる事もあるかもしれないが、校外体験学習も終った今、あの二人は自分から近づく理由はない。志郎が協力してくれたことは認めるが、それももう昨日までの事だ。気にすることは無い。なのにつまらぬ夢まで見て、つく

づく自分は情けないと優菜は思った。

自分で思っているよりトラウマになっているのかな？

いけない、と優菜はベッドの上に無理に起き上がった。このまま行くと救いの無い堂々巡りの思考に発展しそうだった。

窓の外は昨日の曇天から一転し、良く晴れているようだった。ベッドに膝をつき、優菜は小さな出窓に寄りかかって窓を開ける。存外爽やかな風が滑り込んできた。お気に入りのプリント模様の薄いカーテンが笑うように揺れた。

こういう日に家に閉じこもっているのはよくない。行きたかった図書館に言ってみようか、それともただ散歩をしようか、考えながら優菜は着替えた。そして、とりあえず朝食をきちんと摂る事だと、キッチンに向かう。食パンを焼いている間に落とし卵を作って、野菜を切るのが面倒だったので残っていたプチトマトを添えると簡単な朝食の出来あがりだった。確か野菜ジュースがあったはずだと冷蔵庫を開けると、昨日志郎から貰った缶コーヒーが目に入った。

優菜は普段余りコーヒーを飲まない。職場で勧められると口にはするが、自分から飲もうとは思わない。寝つきが悪い方なので、特に夕方以降は絶対に飲まない。昨日の夕刻、志郎から出された缶コーヒーを飲まなかったのはそういう訳もあったのだ。

手に取るとすっきり微糖、カロリーオフ等と書いてある。別に微糖でなくても構わないが、夢見が悪かったせいで覚醒がしっくりこないこともあり、優菜はめったに飲まないそれを手に取った。缶から直接飲むのは昔からした事がない。よく冷えた缶コーヒーはお行儀良くタンブラーグラスに注がれた。セピア色の液体が陽をはじい

て揺れる。一口飲むと程よい苦味が体に染みとおっ脳細胞がピンと張るような感じがした。それは快い感覚。

存外美味しいわね。朝にならいいかも。

幾分気分が直った優菜がたっぷりとバターを塗ったトーストに噛り付いていると、後ろの電話が鳴った。珍しいことだ。土曜の朝に優菜に電話をかけてくる人物の見当をつけながらディスプレイを覗くと意外なことに職場からだった。訝(いぶか)りながら受話器をとる。

「はい、羽山です」

「あ、羽山先生？　俺です、藤木。今学校からなんだけど」

藤木は三組の担任である。優菜より五年先輩だが、休日なのに朝から出勤しているらしい。

「あ、おはようございます」

「おはよう。休みなのに悪いね」

「藤木先生こそ、土曜日なのにお仕事ですか？」

「ああ。俺、今日中に授業のプリントつくろうと思って朝から来てたんだ。……で、さっき電話があって偶然俺がとったんだけど、二組の保護者からだったもんで」

「え！　ウチのクラスの保護者？　誰ですか？　何かあったんですか？」

急に体に緊張が走り、優菜は早口に尋ねた。

「いや……別に大した事が無いと思うんだけどね。竹中なんだ。あそこの母親から電話が掛ってきた」

「竹中君！　竹中君がどうかしましたか？」

「昨夜、母親と大喧嘩して今朝早くに家を飛び出したんだと。いや……本人は別にどうということも無いだろうよ……多分。問題は母親の方だ……と思う。あの子普段おとなしいだろ？」

「ええ、大人しくってきちんとした児童ですが……」

優菜は小柄で温厚な竹中わたるの事を頭の中で思い浮かべた。家庭も普通で特に大きな問題は無かった筈だ。

「あの子な……昨日母親に将来店をやりたいって言い出したんだと。ケンカの原因はそれ」

「店を？」

確か、竹中は昨日の体験学習では志郎のリカーショップでがんばっていた様子だった。そういえば、確か女の子達が母親が心配して何度も様子を覗きに来たって言ってたっけ……優菜はその時の様子を思い出した。

「うん、それであの子は一人っ子なんだって？」

「ええ、そうです」

竹中の母親には四月の家庭訪問の折に一度しか会ったことはないが、確かに学習面でのことをくどくどと優菜に訴えてきた記憶がある。その時の印象は息子と同じように小柄だが、少し癇癖なきらいがある印象を受けた。温厚なわたる君とはずいぶん感じが違うので、優菜が父親のことを尋ねる、と急に不機嫌な顔になって話を逸らされたことも思い出した。

「……で、今まで話を聞いてたんだけど、電話を受けた俺の印象では、竹中のお母さんは息子に過剰に期待しているらしい。主に勉強の方で。それで、色々将来に夢を描いているのに、店をしたいとは何事だ、学校はなんていう体験をうちの子にさせてくれたんだ！それで親に反抗して家を飛び出してしまったじゃないか。どうしてくれるんだ！……って、長々話してたけど簡単に言うと、まぁこういう訳なんだな」

「そう……ですか」

初めての保護者からのクレームである。自分の心臓が嫌な動悸をさせている事を優菜は感じていた。

「でな、ヒステリックにまくし立てるもんだから、こう言う時のセオリー通り、とりあえず話聞いとこうと思ってテキトウに相槌をうってたんだ」

「はい……それでどうなりましたか？」

「いや、一通り聞いた後で、『そうですか、昨日の体験学習がよほど楽しかったんですね？　だからお母さんとしては、お店をする事に憧れを感じた彼の気持ちに共感して、一緒に喜んであげて、将来の話はまた別にしようね～とか言ってあげたらよかったんですよ。

わたる君はこちらで心当たりを探してみますからお母さんはお家で待っていてください』ってな具合に適当になだめておいた。お母さんも最後は落ち着いてそうしますって電話を切ったよ」

「ああ……そうでしたか……すみません。ありがとうございます」

流石に落ち着いた対応だと思った。藤木は児童にも、保護者にも人気がある青年教師だ。指導する時にはきっぱりとした口調で話すが、普段は優しく、面白いお兄さん先生で運動にも長けているため、良く休日にも地域のスポーツ少年団の催しに引っ張り出される。きっと心配と憤慨でパニック状態の母親を上手くなだめてくれたのに違いない。優菜は電話を取ってくれたのが藤木であったことを感謝した。

「いやぁ……なんつーか、休日なのに一方的な電話を学校にかけてくること自体が、ちょっと異様だって感じたんだが、まぁ大体わかったし。同じ学年の俺がいて取りあえずは幸いだった。誰も居なけりゃ警察沙汰になってたかもしれない勢いだったしな。あの人は普段からああいう直情的で神経質な母親なんだ？」

「ええ……家庭訪問でしかお会いしてませんが、多分そうです。で、竹中君は今のところ、まだ家には帰っていないんですね？」

「そうなんだよ。聞いたところでは、昨夜ハデに親子ゲンカして――つか、親子ゲンカになったのもそれが初めてらしいんだが、今朝母親が起きてきたら既に出てった後だったらしい。自転車といつも持ってるカバンが無くなっていたそうだ。そんなことは初めてだそうで滅茶苦茶心配していた。所持金は殆ど持っていないそうだから、まぁ、腹が減ったら帰ってくるでしょうとは言っといたんだが」

「私、今からお家に電話をして、竹中君がいそうなところを聞いてみます！」

優菜は勢い込んで言ったが、直ぐに藤木に止められる。

「よせよせ。母親の方はしばらくほっとけって。大人なんだし。それより今から学校来れる？」

「はい！　すぐに支度をします。三十分ほどでいけると思いますから」

優菜は時計を見た。

「自転車？」

「はい。ダメですか？」

「いや、そのほうがいい。チャリンコの方が機動力があるからな。俺、今から近くの子に彼がいそうなところを聞いておくから、一緒にその辺を廻らないか？　まぁ心配ないとは思うが、一応話を聞いてしまったし、何かやっといたほうがいい」

「はい！　……でも、先生はお仕事があるんじゃ……私一人でも」

「まぁ、大丈夫だろ。まずは竹中だ。一人より二人のほうがいい。俺はここ四年目だから、土地勘もあるしね。プリント作成は後で手伝ってくれたらいいから」

藤木の声は明るく、優菜は胸の動悸が少し収まって来るのを感じた。

「あ、わかりました。それではすぐに支度をします。お電話ありがとうございました。では」

優菜は受話器を置いた。汗をかいたグラスから勢い良くコーヒーだけを飲み干すと、手早く身支度を整える。十分後には学校に向かって自転車を飛ばしていた。

竹中君がケンカだって……

優菜はペダルをこぐ足に力を込めながら、四月から今までの竹中わたるの事をできるだけ思い返していた。

Tシャツとハーフパンツから伸びた細い少年らしい手足。小さな顔の中の茶色い目はいつも笑っているが決してお喋りな方ではない。目立たないがクラスの皆にしっとりと溶け込んでいるのは性格の穏やかさ故だろう。イジメのようなことを受けている様子はないし、いじめる側になど間違っても立ちそうにない少年のことを優菜は微笑ましく思い浮かべた。

店をやりたい――彼は何を思ってそう言い、母親は彼に何を言い渡したのか？

親子関係だってコミュニケーションだ。話をして、話を聞いて共感したり、認め会ったりするところから子どもは健やかに育つ。さっき、藤木はそんな風な事を言って母親をなだめたと何気なく言っていたが、それは適切な助言だったと優菜は思った。優菜の印象ではどちらかと言えば話を聞くよりも自分が目一杯喋りたいタイプの

母親だったからだ。それを聞いた彼女が、今後どう言う風に息子に向き合っていくかまではわからないが。

とにかく、竹中君を見つけて話を聞かなきゃ

駅を抜けて一本道に差し掛かった優菜の目の前に小学校が見えてくる。

既に志郎の事も頼子のことも頭の中から消えてしまっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8580x/

茜色の君に恋をする

2011年12月25日20時57分発行